

---

# 王妃道の贈り物

二上 ヨシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王妃道の贈り物

### 【Nコード】

N8356S

### 【作者名】

二上 ヨシ

### 【あらすじ】

豊かでありながら、冷酷な王に怯える国、ローデルランド。人々は城へ向かう途中に流れる大きな河を王妃の道と呼び、<sup>クイーンロード</sup>王の心を癒す妃が現れるのを待っていた。そこへ新しく後宮に来た崖っぷち貴族のセシリア。令嬢とは言いがたい父親譲りの破天荒な性格で、王の心を……？（\*名称変更しました）

## 第一話…はじまり

「はああ……」

これで何度目だろうか。セシリアは鏡に映る、美しく飾り付けられた自分自身にため息をついた。

いい香りのする香水、豪華なネックレス、きらびやかな淡いピンクのドレス。

女性なら喜びそうなものを全て身につけていても、セシリアの心はこれっぽっちも晴れなかった。

「セシリア様」

ノックの音に気づかなかったらしいセシリアは、ビクリと肩を跳ねさせた。

「ドリー」

黒いメイド服を着た茶色い髪の彼女は、暗い顔で近寄っていく。

「ご気分は如何ですか」

彼女はセシリアの肩に乗せ、その心を案じるように撫でた。鏡越しに合っていた視線をぎこちなくそらす。

「だ、大丈夫！ お父様がお亡くなりになって、お母様があのような病気で。だからもうこれは、仕方ないわ！」

それはどこか、彼女自身を慰めているかのようであった。

「陛下に気に入られて、あの方の妃になれば。今や名前だけになつてしまったこのアディソン家も復興する。そうでしょう、ドリー？」

それは病床に伏せる母親が、何度も何度も涙ながらに訴えたことだった。それをオウムのようにドリーに告げる。

「セシリア様。私は分かっております。あなたはアディソン家のことではなく、奥様の身を案じられているのだと」

まるで姉妹のように育ったドリーには、セシリアの心がよく分かっているようであった。

「でなければ、あのような冷酷なお方の元へなど……」

そこでドリーはハッと口をつぐみ、「出すぎたマネを」と頭を下げた。

「いいの。こうなったら、なるようになる！　いいえ、やってみせるわ！」

明るくそう返すセシリアに、ドリーは、

「ええ、セシリア様ならきつとよいお紀様になられますよう！」

と鼻息を荒くした。

第一話・はじまり（後書き）

あとがき

他にも後宮ものを書いていますが、あっちがシリアスなもので、むしょーにほんわかしたものが書きたなりました……。。

## 第二話：最悪な初対面

豪華な馬車の迎えに、セシリアは息を吐いた。キツと前を向いて覚悟を決める。

（いよいよ、私は……！ 冷酷な王様か何か知らないけど、王妃の座さえ手に入ればいいんだから！ それで、お母様だって）

興奮を押さえるように深呼吸し、白いハンカチを振って別れを告げるドリーを背に、セシリアは金の馬車に乗り込んだ。

（あれが、王宮……？ 不気味）

天気が悪いからということもあるのだろうか、小船から見た王宮はどんよりと暗く、人が住んでいるのかどうかも怪しいほどであった。

セシリアはやはり思っていたキラキラの王宮暮らしとは少し違ふようだと、早速肩を落とす。

この国はとても豊かな国だった。国の中心を通るキリー河は、肥えた土壌と新鮮な魚を人々に提供し、交通網の発達にも寄与していた。

人々はこの河を崇め、愛し、大切に扱っていた。

その大河の上流にあるのが、この国の君主の住まう城。周囲は険しい山々に囲まれており、船でしか行くことのできない場所にあった。

セシリアはその後宮へ入ることが決まったのだ。

だが大変に穏やかな河の先にいる王は、とても残虐な性格をしていた。

気に入らないことがあると、それがどれだけ優秀な部下でも、どれだけ善良な市民でもすぐに処刑した。

それにより、暮らしは豊かでありながらも、お城の中も国もどこか殺伐とした雰囲気漂っていたのである。

しかし、人々は小さな希望を持っていた。いつかこのキリー河が心優しい姫を運び、王の心を癒すだろうと。嘘とも真ともつかず、まるでおとぎ話のように囁かれていた。

そこらいつしかキリー河は、”王妃道”<sup>クイーン・ロード</sup>と呼ばれるようになり、贈り物たる妃の誕生を静かに待っていた。

そんなことに疎いセシリアは、河の上を滑るように進みながら、薄暗い王宮を見つめ、

（私はホラーは苦手なのよ！！ お部屋にバスルームがあるかしら……？）

王に会うよりもまず、真夜中のお手洗いの心配をしていた。

「あなたの部屋はこちらです」

とても広くて豪華な部屋だった。窓の外は雨が降り始めている。まず最初に王と会うとばかり思っていたセシリアは、いきなりこ

れから住むことになる部屋に案内されて出鼻をくじかれた気になった。だがバスルームはとりあえず各部屋に一つあるようで安心する。外が厚い雲に覆われているだけでなく、王宮ないも明かりがあまり灯っていない。

「あの」

案内係の女性を呼び止めた。

「私はこれからどうすればいいのですか」

案内係の女性が小さくため息をついたのか、それとも鼻で笑ったのかは分からない。だがセシリアを見る目はとても冷たかった。

「そんなこと、ご自分でお考えになってはいかがですか？」

おそらく、落ちぶれ貴族のセシリアが妃になる可能性などアリの目玉ほどもないと思われたのだろう。新しく後宮へ女性が入ったというのに、丁重に扱おうという気は見られなかった。

それだけ言い残して立ち去っていくその女性に、セシリアは密かに奥歯を噛み締めた。セシリアは名のある家の育ちだったが、破天荒な性格の父の遺伝子をそのまま受け継いだかのように、お嬢様とは言いがたい性質をしていた。

子供のころはドロだらけになるまで遊びまわったし、気に入らない相手がいるとイタズラで仕返しをする。母親にはたびたび咎められていたが、まあまあとなだめる父親のおかげでそのままに育った。

その性格が災いしたのか、無碍に扱われたことにセシリアは怒りを覚えていても立ってもいられなくなった。

一度覚えた怒りは、何かにぶつけるまで彼女の中からは消えない。



セシリアは戸口に立ってそつとヒールからかかとを抜くと、わざとらしく「あーれー!!」といいながら案内係の女性めがけて足を振った。

廊下を、背を向けて歩いていた女性へぐんぐんとヒール弾丸が迫る。

スコーン!!! と見事命中したヒールに、セシリアは真っ青になった。

「あ、あれ……」

案内係の女性がサツと道を譲った先にいたのは

「貴様」

ヒールがぶつかって額を赤くしたのは、背の高い、金髪碧眼の世にも美しい男性だった。

(ま、ま、ま、さか)

後宮に入れる男性など、たった一人しかいない。セシリアは僅かに後ずさった。

「王様サマでいらっしやいますか？ あ、このたびはお日柄もよく

」

王は無表情で人差し指をセシリアに向け、

「死刑だ!!」

（お父様、お母様、ごめんなさい。私は部屋について数秒で死刑になりました……あははは）

笑い事ではないと思いつつ、セシリアは頬を引きつらせながらも、笑うしかなかった。

### 第三話：恥を知りなさい！

「死刑だ！」

そう指をさす王に、セシリアは言葉を失った。

その言葉に反応するように、女性警備隊が風のように現れて彼女を拘束する。

「いだだだ！ 関節！ 関節がつ！」

女性とは思えぬ声を上げたが、もはやカワイ子ぶっている場合ではないのだ。

「あつ……」

王にアゴを持ち上げられ、セシリアは負けじと彼を睨みつけた。スカイブルーの透き通った瞳は、まるで冬の空のように、冷たくキーンと張り詰めていた。

「何だその目は。余の決断に不服があるのか」

瞳孔がギツと萎縮する。セシリアは背筋がゾツとするのを感じた。

（何か言わなきゃ！ 何か言わなきゃ……私、このまま……）

セシリアは必死に考えをめぐらせた。己の命がかかっているのだ。次の言葉で生死が決まる。

ゴクリと唾を飲み込み、

「ぼ、暴力反対！」

「は？」

(バカ！ 私何を言ってるの?)

命を懸けた発言が、よりによって町角のパンより安い言葉だったことに、彼女自身が最も失望した。

王をふと見れば、まるで踊り狂う豚を見ているかのような、とても怪訝な顔をしている。

だがそんな表情をしようとも、彼の端整な顔立ちが陰ることはない。顔の美しい者は得であると、セシリアはこの場にそぐわないことを思っていた。

「女、まだ余に齒向かおうというのか？」

「私は女と言う名前ではありません、セシリア・アディソンです」

強調するかのように、特に名前の部分に力を込めた。

「アディソン？ ああ、無能な父親が死んで借金に首が回らなくなった、哀れな没落貴族か」

「っ」

ローデルランド王国の若き王は、名をクライド・アーキン・オルデイスと言った。

クライドは女性よりも美しい唇を、あざ笑うかのように残忍に曲げる。

「ここへ来たということは、大方お家を護るように死にかけの母親から仰せつかったのだらう。自己の利のために娘を売るとは、フン、老い先短いそなたの母も口クな死に方をせんだ」

パチン！ と頬を叩く乾いた音が廊下に響いた。警備の手をふりほどいたセシリアは、その瞳にたくさんの涙を浮かべて口元を震わせていた。

「ロクな死に方をしないのはあなたの方です、陛下！ よくもそんな非情なことを……っ。恥を知りなさい！」

恥を知りなさい！

恥を知りなさい！

恥を

恥を

彼女の頭の中で、その言葉が何度も反響する。

(あ……。死刑確定させちゃった)

ジンジンと熱い掌、バクバクと脈打つ心臓。

(やってしまった！)

セシリアはそう思った。だが、後悔などしてはいない。

殺すなら殺せばいい。自分を大切に育ててくれた愛する両親を、あるうことがあんな風に侮辱されたのだ。

自分の命おしさに、黙ってなどいられなかった。

クライドは刃のような視線を向けると、

「来い、女」

「いやあー！」

セシリアは髪を乱暴にわし掴みにされると、さき程案内された部屋へ無理やり引つ張り込まれた。天蓋つきの豪華なベッドへ放り投げられ、すぐさまクライドが覆いかぶさってくる。扉は案内係に閉められた。その直前、彼女のイヤミのこもった卑しい目が垣間見え、後々仕返しをしたいところだが、今はそんなことに構ってはもらえない。

(何なのこれ！ どうすればいいの！)

半ばパニックに陥るセシリアに、クライドは不敵な笑みを浮かべた。

「その度胸、気に入った。そなたに余の子を孕ませてやる」

「……え」

(何ですか、その下品な宣言は！！)

「おい、礼を言わないか」

セシリアがそれを拒絶するかのようにそっぽを向いたが、想定内のことだったのかクライドは大して気にも留めてはいないようだった。

「お前は楽しめそうだ。色々と」

そう含み笑いをすると、セシリアの白く細い首筋に顔を埋めた。

「んっ……」

ねっつりと舌が首を這い上がってくる。抵抗しようにも、いとも

簡単にねじ伏せられた。

男女の力の差は歴然としていた。どれだけ声をあげようと、助けなどくるはずもない。

まるで引きちぎられるかのように手荒くドレスを脱がされながら、セシリアは、

(いつかものすごい復讐をしてやる！)

と別の意味で燃えあがっていた。

第三話・恥を知りなさい！（後書き）

あとがき

感想等、お待ちしております！



#### 第四話：王のオモチャ？

まだまだ太陽が顔を見せない、朝とも夜とも言いがたい時間帯。城内は見張りの兵と朝食の仕込みをしているシェフ以外は誰も起きてはおらず、ひっそりと静まり返っていた。

そんな城の後宮にて、一糸まとわぬ姿の男女が一つのベッドで体を寄せ合う。

だが二人の間に流れているのは事後の甘い雰囲気とは言いがたく、特に彼女の方がどこかピリピリとしていた空気を放っていた。何度も体を離そうとするが、彼のほうがそれを許さない。最後は諦めたようにしぶしぶ抵抗をやめた。

「嫌がっていた割には、最後は喜んでいたな」

そんな彼女に気づいているのか、いないのか。クライドは腕の中のセシリアを鼻で笑うかのようにそう言った。

「喜ぶ？ 勘違いしないでください！」

「赤面しながら、必死に余にしがみついていたではないか」

初めての経験のこと。当然怖くてしがみつきたくもなる。なのに

（なんてデリカシーのない！ その美しいお顔の二パーセントでも、心にキレイさがあれば）

だが乱暴に始まった行為も、それが進むにつれてまるでセシリアを気づかうかのようなソフトなものになっていった。

あまりにもゆっくりと丁寧だったものだから、いよいよの”あの時”にもほとんど痛みを感じなかった。

むしろ

と思ったところで妙な感想を抱きそうになり、セシリアは軽く頭を振る。

だが、もしかして本当はいい人なのではないか、話せば分かってもらえる人なのでは、という考えがよぎった。

強引に腕枕をされながら、セシリアはそつと天井を仰ぐクライドを盗み見た。

キリツと程よい角度で上がった肩、清水のような瞳、一本スツと筋の通った鼻、完璧にバランスの取れた端整な顔立ち。

美の女神、アフロディーテすら魅入ってしまうのではないかと思わせるほどの美青年であった。胸を高鳴らせずにはいられない。

しかしクライドのその容姿は、オリュンポス十二神たる彼女とは違い、”神々しい”というよりまるで悪魔的な妖艶さを纏っているように見えた。冷酷な王との呼び名がそう思わせるのか、それとも何もかも見透かしたような彼の不敵な笑みがそう感じさせるのかは分からないが。

彼女の視線に気づいたクライドと目が合い、セシリアはドキリとした。紺碧の瞳が優しい色を湛えて近づいてくる。クライドはそつと、セシリアの耳に顔を寄せた。

「可愛かったぞ、セ・シ・リ・ア」

「っ」

白磁器のように美しい歯で耳を甘がみされ、セシリアは不覚にも顔を真っ赤に染め上げてしまった。心臓が全力で走った後のように

暴れている。

「あ、あの……私」

「冗談だ。没落貴族」

「くっ！」

（殴りたい！ そのキレイな顔に、今すぐこの怒りの拳を沈めてやりたい！！）

クライドはセシリアの頭を枕へ落として体を起こすと、ベッドの下に散らばっていた服を集めて着始めた。その男性っぽさを感じさせる背中を見つめながら、すでにしっかり見られた後ながらも、シーツでできる限り肌を隠して体を起こす。

（この人私で遊んでる、絶対そうだわ！）

どうやら自分はオモチャ認定されたいらしい、とセシリアは思った。それに怒りを覚えながらも、内心ほくそ笑む。

（でもいつまでそうやって主導権を握っていられるかしら？ 私だって復讐のチャンスは逃しませんから！）

両親を侮辱され、こうやって体まで汚された。そういえば、ここへきてすぐにベッドへ引きずり込まれたせいで毎日の楽しみである夕食も食べていない。

腹の虫を何とか制御しつつ、それら全ての恨みを晴らすべく計画を練る。

（お酒と言って苦い汁を飲ませてさしあげようかしら。それとも背中にとりと張り紙をつけたり……ふふふふ）

それが”復讐”と呼ぶに値するほどのレベルにはなく、単なるイタズラ止まりであったが、彼女にとっては何かされて仕返しをすれば、それは”復讐”の枠に収まるようであった。

(いつかこの、ご憎たらしい王をぎゃふんと)

「セシリア。下手なことは考えるな」  
「え！」

思考を読まれたような言葉に、セシリアは焦って予想外に大きな声が出た。

「そなたの母を助けたければな」

シャツの最後のボタンを留めながら顔だけ振り返り、見た者を一瞬で悩殺できるような微笑みを見せる。

「病を患っているのだろうか？ いい医者をつけてやる。そなたが大  
人しく余に従っている限り、だがな」

(さ、最低だわ。お母様を人質にとるなんて！)

やっぱりろくでもない人間だ。外見に騙されるところだった、とセシリアは眉をひそめた。

「これからも存分に余を楽しませろ、王妃道の贈り物よ」  
クイーン・ロード

きっちりと服を着て心なしか楽しそうに扉へ向かうクライドに、

(誰が何とかの贈り物よ！ 私はモノじゃない！)

そう叫び出したくなるのを、母親をストップパーに何とか止めた。いくら腹が立ったとは言え、いい医者をつけてもらえなくなるのは正直困る。

(我慢！ 我慢よ！ 忍耐こそが成功への道しるべ！！)

日が出るまでに帰ろうと、廊下へ出ようとしたクライドは「ああ」と足を止めた。

何かを思い出したかのように、ベッドの方へ戻ってくる。

(何！ ナニ！ なに！)

シートで体を隠し、身を硬くしながら構えた。

クライドはベッドの脇に腰掛けると、セシリアの後頭部に手を添えてぐいと引きよせた。

「んっ……ふ、んん……っ」

いきなりの濃厚なキスに、セシリアの体が熱さを取り戻していく。まだまだ慣れないそれに、クライドの服をキュッと掴んだ。逃げ回るセシリアの舌をクライドのそれが捉えてからめとる。

(い、息ができない……っ！ く、空気！ 空気い！)

色気のかけらも無い心の声だが、本当に苦しくて仕方がない。どんどんと何度か胸を叩いた。

クライドは名残惜しそうに顔を離すと、セシリアの唇を汚す唾液を大きく舐め取った。

「ひやつ……！」

ゾクリとする感覚に、意図せず女性らしい声が出てしまった。顔を赤く染めて肩で息をするセシリアを、サファイアのような瞳が映す。

「可愛いと思ったのは、嘘ではない……かもな」

至近距離でのまさかの言葉に、カツと顔が火照った。濡れた唇が艶やかに色づく。

（やっぱり悪魔だわ）

振り返りもせずに出て行くクライドを横目で見やる。扉が閉められ、やっこのことで一人になると、セシリアは「ああっ！」と髪の毛を振り乱してベッドに沈み込んだ。ベッドの天井の、美しい藤の絵をじっと見つめる。

翻弄されている？ まさか。  
だが

”冷酷な王”。

そう聞かされてやって来た。なのに母親のことも助けしてくれるよ。うだし、思ったほどの冷たい印象はない。イヤミな人物であることは確かだが。

（もしかして、何か企んでるのかしら？）

セシリアは目を瞑って、ヒゲをさするよつにアゴをなでた。小さい頃に読みかじったファンタジー本に出てくる、白く長いヒ

ゲを生やした賢者の仕草である。彼はこれをするといつも、どんな難しい問いに対してサラリと答えを導きだした。それが幼心に強いインパクトを与えたらしい。

彼のようなヒゲを作りたいがゆえに、飼い猫イルマタルの白銀の毛をさみで切り取ってこっぴどく怒られたことがあった。反省したものの、イルマタルはあれ以来セシリアの顔を見ると脱兎の如く逃げ出すのだ。

だがセシリアが王宮へ向かう馬車に乗り込んでふと窓を見上げると、彼女は窓辺に座ってじっとこちらを見ていた。それがどこか悲しそうだったのは、セシリアの思い過ごしではないだろう。

そして今も時々、考えるときにはこの仕草を真似てみる。良い考えなど浮かんだ試しはないが、浮かぶ気がするのである。

(うーん。惚れさせてから捨ててやろうとか、何か秘密を握ってやろうとか……。でもそんなこととして何か意味があるのかしら。からかってるだけ?)

とにかく、あんな王の妃になどなりたくはない。初対面でこれでは、結婚などすればどうなることか。毎日あんな調子では、頭の血管がもたない。

よし、とセシリアは決意した。

「お母様は助けてもらいつつ、王には嫌われましょう！ お母様の病気さえどうにかなれば、別にお妃になんてなる必要ないんだから」

不器用な彼女に、相反する二つの事柄を要領よく並立させることなどできるはずもない。

だがこれも父親譲りなのか、全く見通しが無いにもかかわらずセ

シリアは自信に満ち溢れていた。

「ふふふ、そうと決まれば……」

セシリアはサイドテーブルから紙とペンを取り出すと、あの王に嫌われるための計画を楽しそうに立て始めた。



第四話・王のオモチャ？（後書き）

あとがき

上手く嫌われることができるか……？

## 第五話：母の思い

「もう一週間ですね、奥様」

メイドのドリーは、温かな飲み物をベッドに座る貴婦人に手渡し  
た。窓の外は夜の帳が降りていた。風が穏やかに木々を撫でる。

貴婦人はとても上品な面立ちをしていたが、その茶色い髪に艶は  
なく、青い瞳も疲れたように覇気がなかった。時おり出る咳に体を  
曲げ、ドリーは優しく背中を撫でた。

「ありがとう、ドリー」

「いえ」

「私もヒドイ母親だわ。あの子は王宮に行きたくなかったでしょう  
に……」

マイラ・アディソンは、セシリアの母親だった。

夫が亡くなってからは貯金を崩すだけの生活。いや、それどころ  
ではない。借金の形にとロココ調の美しい家具や趣味で集めていた  
絵画、宝石や衣類、全て取られていった。

思い出のたくさんつまった白い家はかろうじて残ってはいるが、  
ジョー・ド・レコンドの城館を手がけた造園家、アルバン・キュア  
ールの作った自慢の庭は荒れ始めている。

使用人たちにもまともな給与が払えず、それでも長年使えてくれ  
た執事とシェフ、そしてセシリアと仲のよかったこのドリーだけは  
残ってくれた。

他の使用人たちも給与は少なくてもいいと残りたがったが、それ  
ぞれの生活があるのだからとマイラが許さなかった。

皆、この家や家族を愛していたのである。そしてマイラたちも、使用人たちを大切にしていた。それが壊れてしまったのは、ここにいた誰にとつても悲しいものだった。

「奥様。奥様はセシリア様のために、後宮入りのお話を受諾されたのでありませんよう？」

莫大な借金のあるアディソン家の娘をもらおうとする貴族などいなかった。お金があつたころは、あんなにも仲睦まじかつたというのに。クモの子を散らすように人々は去っていった。

このままではセシリアはどうなってしまうのかと、マイラは病気の自分の体よりも、母親として娘の身を案じていた。衣食住のことだけではない。下手をすれば、借金返済のためにと愛するセシリアがどこか汚い男たちの手に渡る可能性もあつたのだ。

そんなことは絶対に避けなければ。

そこへたまたま後宮へ上がる話が舞い込んできた。後宮へ行くのに財政の条件はない。家名に助けられたと神と同時に感謝した。もちろん、冷酷と聞く王の元へ行かせるのは気が進むものではない。

だがこの強大な国の後宮は規模が大きく、六百人も娘たちがいると聞いていた。その中でどうかひっそりと身を潜めてくれていればと願っていたのだ。

後宮帰りとあらば箔もつく。そうなれば、お嫁にと拾ってくれる人もいるだろう。

それに後宮なら、食べ物や着る物に困ることはない。何より借金取りたちの手が届かない。

精一杯の親心だった。ある種の賭けではあるが。

「でも、あの子は曲者ですからね」

そこで初めてマイラは、キラキラとした表情になった。娘のことを思い出しているからだろう。

「なぜかいつも言われたことと反対の方へ進んでいく。お上品にと言えばドロだらけで帰ってくるし、イタズラを止めなさいといえどもっと凝ったイタズラをする。お妃になってと言えば、今頃はきつとそうならないような方法を必死に考えているでしょうね」  
「ふふ、確かにそうです」

さすがに母親だけあって、マイラは見事にセシリアのするであろうことを見抜いていた。

マイラは窓の外を望んだ。

(セシリア。数年の間だけ、どうか……)

「心配ありませんわ。セシリア様なら、きっと上手くやっています」

ドリーもセシリアの性格なら、妃にならずにこの方を助けようとするだろうと考えていた。

「ええ、そうですね……」

そつだと信じたかった。

そこでコンコンと扉を叩く音がした。

「へっくし！」

「そなた……何をする」

クライドは浴びせかけられたくしゃみに、頬をヒクつかせた。

セシリアはベッドの上でシーツに包まり、強引にキスをされてた。その途中に突然感じたむず痒さを我慢できなかつたのだ。

唾がかかってしまったのか、クライドは不快そうに顔をぬぐった。

「わ、わざとではありません」と鼻をこする。

確かに嫌われるための作戦は練っているが、こんな下品な嫌われ方は自尊心が傷つく。

「わざとでたまるか」

怒っているのか呆れているのかは分からない。とりあえず処刑はされないようにホツとする。

あれから一週間。マイラの予想通り、セシリアは何とか王妃にならずに済む方法を考えていた。そのために嫌われようと奮闘しているが、クライドは一枚も二枚も上に行く。

今日も仕掛けていた水入りバケツや、ある地点だけ目一杯かけたワックスがまんまとかわされた。

いや、ワックスは自分が引っかかり、ツルツル滑ってどうにも逃  
れられなくなつたところを”抱いてください”と言う代わりに助け  
てもらつたのだ。

”もつと色っぽく”や”心が入っていない”などと何度もやり直  
しを言い渡された。二十三回目でやっと助けてもらつた後ベッドに  
押し倒され、最中も何度それを蒸し返されたか。

セシリアの人生の汚点ワーストスリー内にもれなくランクインさ  
れた。

初日のあの日から、クライドは毎晩欠かさず部屋へ来ていた。

いっそのこと抱くだけ抱いてさっさと帰ってくればいいものを、  
セシリアをわざと苛立たせるようなことを言わなければ気がすまな  
いらしい。そしてその反応を見ては、またあの不敵な笑みを浮かべ  
るのだ。

子供云々は建前で、むしろそちらがメインで来ているのではない  
かとセシリアは思った。

身体だけでなく、心までクライドに弄ばれる。

(恐るべし、オモチャの宿命……)  
「いつだ」

突然の問いかけに、考え事がそこで途切れた。

「え？ 何がです？」

その答えに、クライドは心底恨めしそうな眼を向ける。

「結婚式に決まっているだろう。プロポーズをしたのだから」

『これからも存分に余を楽しませる。王妃道の贈り物よ』  
クイーン・ロード

クライドはそう言った。

だが”王妃道の贈り物”がお妃を示すとは知らないセシリアは、それがプロポーズだったとは気づかなかった。

いつそんな言葉があったのかと記憶の糸をたどる。

(プロポーズ……?)

そこでアツと思い出す。

『そなたに余の子を孕ませてやる』

(つてあれ!? 嘘でしょう、王様のくせに何てお下品なプロポーズかしら!!)

信じられないとため息をついた。

「なぜ没落貴族の私を妃に? 王族のベレスフォード家やアッカーソン家からお選びになればいかがです」

ベレスフォード家はクライドの母方の血筋にあたり、売れない画家や音楽家のために多くのサロンを開くような芸術をこよなく愛する一族だった。このサロンから今も活躍するピアニストやデザイナーが数多く輩出されている。

対するアッカーソンは彼の叔母の嫁ぎ先だった。こちらも芸術を愛するが、どちらかといえば海外から価値のある品を集め、コレクションするのを好んでいた。特に最近では東洋の美術品に興味を抱

いているらしく、一般向けにもよく展覧会を開催している。

どちらもセシリアのアディソン家とは違い、財界や政界に多大なる影響を及ぼす力を持つ伝統ある名家だった。

「血は遠いほうがいいのだ。余のように美しい顔を持っているなら不器量を、余のように優秀なら低脳を」

「く……ッ！」

他人を不器量やら低脳やら。やっぱりろくでもない人間だとセシリアは齒噛みした。

こんな男が夫ではたまらない。おそらく自分を一生オモチャにする気だろうと思った。

(ん？ ……そっか)

だがそこでセシリアはピンとひらめいた。

(これできつとお妃にならずにすむわ！)

小さく笑うセシリアを、クライドは気味が悪そうに見つめていた。

「どうぞぞ？」

「失礼いたします」

マイラの返事の後、そう言って部屋に入ってきたのは執事のアルバートだった。眉毛が長く、ひげを蓄えているために表情はよく分



からない。

彼は若い頃からアディソン家に仕え、もう半世紀になる。父親もまた、この執事をやっていた。給与は新人の頃よりも安くなっていたが、思い入れの強いこの家に死ぬまで仕えられるのなら彼には十分だった。

「どうかしたの、アルバート」

「ええ、実はお客様が……」

それにマイラは首を傾げつつ、「では、お通しして」と身なりを整える。

執事を始めた頃からそうしていたように、おろしたての白い手袋をしたアルバートは客人を丁寧に室内へと案内した。

入ってきた若い男は左手に大きな黒いカバンを持ち、右腕にきちんと折った白衣をかけていた。濃い栗色の髪に、透き通った淡いブラウンの瞳をもつ、「美しい」との形容がとても相応しい青年だった。

「初めまして。医者のアレックス・ヘンリー・ベレスフォードと申します。国外にいたため、こちらへ参るのが遅くなりました」

落ち着いた声。優しそうな笑顔を湛えていた。

「お医者様……、”ベレスフォード”？」

医者と言う単語と王族を示す姓に、マイラもドリーも息を呑んで顔を見合わせた。

## 第六話・よつご後宮へ

「『』ということで、セシリア様ご安心くださいませ。ドリーより』  
か」

セシリアは届いた手紙を見てホッと息を吐いた。

手紙によると貴族出身の経験豊富で有能な医者らしい。外国で最先端医療を学んで帰ってきたばかりらしく、さっそく治療に取り掛かっていてと書かれてあった。

「腕のいい医者様がついてくださるなんて、こればかりはあの腹黒陛下に感謝しなきゃ」

いつもいつも。ベッドの上でも外でも、屈辱とも取れる発言をされたりさせられたりで苛立ちはつのるばかりだったが、久々にいい知らせだ。

「でもお医者様のことと結婚は別問題だわ。お礼なら別の形でいくらでもできるし」

それにしても、とセシリアは眉間にしわを寄せた。

手紙の末には“お暇ができたなら、ぜひ連絡くださいね”と仲のよかったメイドの丁寧な文字でしたためられている。

(オカシイわね。もう何通か書いたのに)

ここへ来てからというものの、何をしていたやら分からない。確かに後宮の大きな図書館は書物が充実

しているし、楽器の間やらおしゃべりの広間やら、美しい庭やらが

あることは知っている。

だがそんなものはいくらあっても、セシリアの暇は潰せないのだ。山がそばにあることだし、いつそのこと裸足でロッククライミングでも興じてみたいのだが、あいにくそこへ行くには腹黒陛下の許可がいる。

この間、自身の黒歴史にランクインしたワックス事件を思い出して身震いした。弱みを自ら見せるようなマネなどできるはずはない。許可など求めようものなら今度は『ならば余の前で着ているものを一枚ずつ脱げ。ゆつくりとな。全部だ』などとストリップ紛いのことでもさせられる可能性が、図書館の入り口にある超巨大地球儀よりも大きいのだから。セシリアをはずかしめることに関しては、もはや一流の男だった。

(あれはろくな育ち方をしてないわね)

自分の性格はさておき、セシリアは上から目線でやれやれとため息をついた。

今一番の暇つぶしは、母親や懐かしい家の者たちに手紙を書くこと。残った使用人一人ひとりに手紙を書きながら、思い出に浸って一人ニヤケていた。

ガラツと机の引き出しを開けたが、中には何も入っていない。そういう元々あった便箋と封筒が切れていたのだと思出す。これでは手紙が書けない。

ふとそばの置時計をみると、まもなく午後の二時をさすところであつた。

「あ、ちょうどよかった。もうすぐ配達員の人がある頃だわ。今度は売り切れてないわよね」

配達員は午前と午後の二回に分けてやってくる。

今朝便箋と封筒をもらおうとしたとき、もう無くなってしまったと言われてガツクリした。

(でもまあ、急ぎの用事じゃないことだし)と気にせず廊下に出て、午後の配達をしているであろう配達員を探した。

後宮は頻繁に手紙のやり取りが行われていた。親元を離れた娘たちがセシリアのようにホームシックになって……ということではない。

そのあて先のほとんど全てが、この城に住まう若く美しき王、クライドへ向けられたものだった。

彼が後宮にやってきた女性の元へ初日から顔を出すなど、セシリアが来る前だった一度たりともなかった。

それどころか何日何週間何ヶ月、彼の姿を見るのがやっとという者までいる。

クライドとて健全な若い男であったし、この国の宗教は結婚前の男女の行為を禁じているわけでもなかったから、当然後宮へ足を運ぶことは運んでいる。

問題はクライドにとって彼女らが、あくまで六百分の一でしかないということだった。

顔や名前を覚えてもらい、さらに愛してもらわなければ、たとえクライドがご丁寧な一日一人の部屋へ順番に赴こうと、約二年に一

度しか部屋には来てはもらえない。

何とか頻繁に来てもらおう、という苦肉の策が手紙だった。他の後宮の女性たちは、月に何十通もの手紙を書くが、実際のところクライドはそれらをすぐに不要書類の中へ放り込むので役に立っていない。

しかも紙が比較的高価なものだったこの時代。

他のゴミと同じように捨てて燃やすということなどせず、回収してまた紙にというリサイクルがされていたものだから、クライドに読まれなかった手紙たちが、新しい便箋となつてまた愛の言葉を書かれては捨てられて……と何とも不毛な循環を延々と繰り返していた。

「すみません、お手紙を書きたいのですが」

そんなことは知らないセシリアは、ちょうど配達途中だった配達員に元気よく声をかけた。

緑色の制服に身を包み、赤い郵便マークの入った黒いバッグをななめにかけている。国の紋章が入ったワインレッドの腕章をつけ、それが国に認められた一流配達員の証らしかった。

これがなければ城内で手紙を配ることができないらしいが、一体何がどうすれば一流配達員なのかセシリアには分からなかった。

（ポストに入れる動作が速いのかしら）

まるで足の速いカニを思い浮かべ、セシリアは一人で笑いそうになるのを必死に堪えた。

「便箋と封筒をいただけませんか」

声をかけられた配達員は、まるでイタズラが見つかった子供のような、気まずそうな顔をした。

「あ………実は切らしていて」

「え？」

（また？）

配達員はまだ少女だった。お下げにまん丸な分厚いめがねをかけ、いつもどこかオドオドしていた。

「いつになったら手に入るの？」

彼女はじっと俯き、「あ」だの「う」だの、言葉にならない声を発するだけで、セシリアの問いに答えようとはしない。

（どうしたのかしら、一体）

トイレにでも行きたいのかしらと、セシリアは要らぬ心配をしていた。

「ねえ、配達員さん。便箋と封筒くださらない？」

別の後宮の女たち数人がぞろぞろ集まってきて、セシリアと同じようにそつ話しかける。セシリアが挨拶を交わそうとしたが、彼女らはまるでセシリアが見えていないかのように目も合わせようとしない。

(まあ気取っちゃって)

彼女らは皆、有名な貴族の娘たちだった。ある者は大臣の娘であったし、ある者は外国の王族とつながりがある娘。

着ているドレスも身につけている宝石もセシリアとは随分とは違った。貧乏貴族とは口を利かない主義なんだろうとセシリアは齒齧みする。

「あ……はい、どうぞ……」

さつき無いといった配達員の彼女が、その同じ口でそう返事し、さらには目の前で黒いバッグからさまざまな種類の便箋と封筒を取り出して見せた。

セシリアはその光景に啞然とする。

「そうね。じゃ、このピンク色のやつにしようかしら」

「やだ、それ私が狙ってたのに」

「早い者勝ちよ」

セシリアを輪からはみ出そうと尻で押し出し、わいわいと便箋選びが始められる。

(これは……わざとね!?)

そう直感したが、セシリアはそこで“ああ、みんなヒドいわ”などと泣いて帰るようなタマではない。

「ねえ」

少々低めの声に皆動きを止め、一斉にセシリアを振り返った。

「あら、何かしら？ 没落貴族のアディソンさん？」

それに嘲笑が巻き起こる。

セシリアは臆せず、一歩あゆみよった。

「私も手紙を出したいの」

「おあいにくさま。もうすっかり無くなっちゃったわ」

彼女らはクスクスと笑いながら、各々便箋を手にあっという間に立ち去っていく。

「お手洗いの紙にでもお書きになったら？」

すれ違いざまにボソリとそう言われ、セシリアは両手の拳を握りしめた。

（何あれ！ 感じ悪いっ！）

だがセシリアがすぐさま薄い笑みを口元に浮かべる。いい暇つぶしを発見したときの笑いだっただ。

ちよつど生ぬるいこの後宮生活に飽き飽きしていた頃。これぐらの刺激がなければやっていけない。陛下の次はあなたたちよ、といわんばかりにどす黒い笑みを浮かべていた。

「あの……ごめんなさい！」

「え？」

配達員の少女は、ぎゅっとバッグの肩紐を握りしめ、そう言っただけで一目散に廊下を走っていった。



「ねえ、ちょっと！」

声をかけても彼女は立ち止まらず、セシリアは首を傾げながらその後姿を見つめていた。

## 第七話：若き医師

セシリアはヒールを手に、裸足で廊下をヒタヒタと走る。人の気配を感じ、スパイよろしくハツと壁に背をつけて身を隠した。

顔を半分だけのぞかせ、二人組みの女性警備員が通り過ぎるのを待つ。

「午後二時二十分、警備隊B班ヴィエラ回廊を通過。ふむふむ」

セシリアの手帳には、何やら時間や場所がちらちらと乱雑に書き連ねてあった。

警備隊の二人がいなくなったのを確認し、角から飛び出した途端

ピタン！ と何とも景気の良い音と共に軽い痺れが全身を駆け巡った。

どうやら何かにつまづいて転んだようだが、それ以前に何事かと転んだ本人が一番驚く。

「何をやっているんだ？ 貧乏貴族」

その声にハツとして腹ばいのまま振り返ると、クライドが腕を組みながら、廊下の壁にもたれかかっていた。

（み、見つかったっ！）

ほふく前進で慌てて逃げるセシリアに、クライドは腕を組んだままツツカと歩み寄ると、手を差し伸べて引き上げる……ようなくとはせず、セシリアの背中にドカリと腰掛けた。

「ぐう、な、何をなさるんですか！」

じたばたするも、格好が格好のために力が入らない。

「何だこれは」

「あ、そ、それは！」

セシリアから手帳を奪い取り、パラパラとめくって中身を確認する。

「ほう、警備隊各班の通過時間と場所、それにこの辺りの部屋の配置と外へ通じる経路の確認か。脱出計画でも立てていたのか？ん？」

「ちよちよ、ちよつ……あつ」

あろうことかクライドはセシリアにまたがったままドレスの裾をたくし上げ、太ももを直に触り始めた。美しい掌でやんわりとなで上げるようなその触り方が何とも艶かしく、ゾクゾクとした感覚が体を駆け抜けていく。セシリアの顔は一瞬で真っ赤になった。

（こ、こんなところで……！）

「しかし下手な地図だ」とクライドの方はあっけらかんと言いつつ。

「この後宮を知り尽くした余ですら、何が何だかさっぱり分からん。そなた、この世には方向というものがあるのを知っているか？歩いた順に書き記してどうする」

「やつ……ちよ、おやめください！そ、それはただ、早くここに慣れようと思って」

「ほう、では褒めてやろうセシリア」

ツーツと指で内ももをなぞられ、何とも言いがたい感覚に目を瞑った。思い出したくもない寝室での数々が鮮明に頭を巡る。

「！」

鼻血が吹き出るのではないかと、思うほどにセシリアの体は熱くなっていた。実際そうなのは、黒歴史にランクインするほどの恥ずかしエピソードが再び生まれ出る。それだけは阻止しなければと歯を食いしばった。

「陛下、もうそのあたりで許してさしあげては？」

春の木漏れ日のような優しい救世主の声に、セシリアは背骨を軋ませて顔を上げた。

「大丈夫ですか、セシリア様」

目の前に手を差し伸べるその人を見上げる。セシリアにはその人の背後に後光が見えるようだった。

濃い栗色の髪に、透き通ったブラウンの瞳の優しそうな青年。恐ろしいほどに整ったその容姿に、セシリアの心拍数が一気に跳ね上がった。

「あ、はい！」

背中から下りたクライドに、セシリアは服の乱れを整えながらその手を取って立ち上がった。何とも温かみのある繊細な手だろうと思う。

(わあ……キレイな人。陛下は悪魔だけど、こちらは天使様だわ)

黒いカバンを持った青年はその天使の微笑みを浮かべると、

「私は医者のアレックス・ヘンリー・ベレスフォードです。あなたの母上様の担当医を仰せつかることになりました。以後お見知りおきを」

そう言つてアレックスはゆっくりと頭を下げる。髪がサラサラと重力にしたがつて下りた。

(お母様の担当医様……この方が!?)

セシリアは驚きに息を呑んだ。

メイドのドリーの手紙では、“素晴らしく腕のいいハンサムですテキでお優しいそんなお医者様”とだけ書かれてあったものだから、頭の中では口ひげの似合いそんなダンディーなオジサマ医師を想像していた。腕がいいと聞いて、てっきり経験豊富そんな人を思いうかべていたのだ。それがこの若さ。

失礼と思いつつ、つい靴の先から頭までジロジロと眺めてしまった。

「粗相はするなよ。何せ余のいここにあたる者だ」

「そ、そんなのですか?」

このガゼルのように穏やかな空気を放つ青年と、ライオンかヒョウかと思うような殺伐とした王との間に近しい血が流れているとは、世の中は分らない、とセシリアはつくづく思った。

(ああ、やっぱり腹黒より純粹で優しいそんな男性ってステキ!)と

ときめきに頬を染めるセシリアを知ってか知らずか、クライドはセシリアの腰に手を当てながらその耳元に唇を寄せ、

「そなたのような女には手に負えん男だ」

と艶っぽく囁いた。その意味がわからず、セシリアは“はて？”と眉をひそめて首をかしげた。

「まさかベレスフォード家の方がお医者様をなさっているなんて。あ、いえ……別に変な意味ではなく」

セシリアの部屋のバルコニーには、白のテラスチェアとテーブルがあった。そこに用意された紅茶を口にしながら、セシリアはそう言う。庭から吹き上がってくる心地よい風が頬をなでた。

ベレスフォード家は、売れない画家や音楽家のためにサロンを開く芸術をこよなく愛する一族で、神学や文学、法学に秀でたものが多かった。逆に言えば科学や物理、数学といった理系方面を得手としているものは少ない。

そこでアレックスは表情を硬くした。

「実は幼い頃、身内を病で亡くしたんです」

「え……」

セシリアは予想しなかった言葉に、カップを持ったまま身をこわばらせた。彼女の隣に座るクライドも何も言わない。

「そのとき何もできなかったことがとても悔しくて。もうあんな思

いをしなくてすむような、そんな力が欲しかった。この仕事はその答えなのでしょう」

遠くを見つめるアレックスは、その表情に少しの悲痛をにじませていた。きつと未だにその記憶は彼の心の傷となつて、ことあるごとくに彼を痛めつけるのだろう。

「申し訳ありません。お辛いことを思い出させてしまって」「いいえ、お気になさらず。我が一族のことを知る方なら、誰しも気になることです。それに私には天職のようですし」

そうやんわりと笑うアレックスに、セシリアはホッと安らぎを覚えた。ハリネズミのようにトゲトゲしくすさんだ心に、何とも新鮮ですがすがしい早朝の風が吹き込んだようだと思つた。

(どこかの猛獣とは大違いだわ。どこかの猛獣とは )

チラリと見たそのどこかの猛獣がジッとこちらを見つめていて、セシリアはドキツとする。どこか優しさすら漂わせるそのサファイアのような瞳から、不自然ながらも慌てて目をそらした。

(な、何？ あの目は……)

「ところでセシリア様、一つよろしいですか？」

「え、あ、はい」

紅茶をソーサーにおいてアレックスを見やる。彼はセシリアの方を向いておらず、じーっと食い入るように部屋の中を見つめていた。

「あの壁に飾られている絵ですが、右に八分の一インチ(約三ミリ

メートル)ほど傾いていませんか」

「……え？」

一瞬何を言われたのか分からなかった。

だがゆっくりと頭の中で理解し、セシリアも部屋の中の森の絵を見る。

傾いているような、いないような。そう言われてみれば、まっすぐではないような気もするが、はっきりと、

“ふむ、そうですね。右に八分の一インチ傾いております”  
とは言いがたい。

「さあ、そうですね？ 私には分かりませんが」

「ちよっと直してきます」

セシリアの答えなどハナから期待していなかったのが、アレックスはテーブルに手をつけて立ち上がった。

「え、あの、アレックス様？」

「ついでにあの本棚も分類や大きさがバラバラです。それにあの陶器の人形は二度ほど正面からずれている。あとあの花瓶の花も均衡がいまいちとれていない」

「へ、平気ですよ。私は別に気になりません」

「セシリア様」

アレックスはため息をつきながらゆるやかに頭を振った。そのたびに指どおりの良さそうな髪が小さく揺れる。

「いいですか、生活の乱れは体の乱れ。周りの物はいつもきちんと揃えてかつ清潔に。そして規則正しく過ごすことが大切です。それとセシリア様のイアリングですが、どうも左右位置が二五分の一イ



ンチ（約一ミリメートル）ずれているようですのでご確認を。おそらく転ばれたときにずれたのでしょう」

そう言い残して部屋の中へ入ってあちこち直し始める。

（細かあッ！）

セシリアは耳に手をやりながら、唾然としてその様を見つめた。それにクライドは小さく笑う。

「言っただろう。そなたのようなズボラな女には手に負えぬと。あれは昔から極度の完璧主義者だ。僅かなズレも歪みも許せん夕辰らしい。綿密な作業をしいられる医者には向いているのかもしれないがな」

「へえ、そうですか……って誰がズボラですか！」

そうは言いつつ、勝手に部屋を寸分の狂いもないほどピッタリと整えて回るアレックスの姿に、

（これは無理ね。長く一緒にいたら窒息するわ）

と少々散らかっている方が落ち着く派の彼女は悟った。

「陛下」

満足したのか、しばらくしてアレックスがバルコニーへ帰ってきた。その後ろに見える部屋は一見何も変わっていないが、その実、寸分の狂いもバランスの崩れたものもない。

「私はこのあと会議があるのでこれで」と懐中時計をしまいながら

言った。

「ああ。ご苦労だった」

「セシリア様、ご安心して私にお任せください。必ずお母様のご病気を治してみせます」

「はい、よろしく願います！」

セシリアはスツと立ち上がると、彼に深々と頭を下げた。部屋を勝手に修正されたことはともかく、この人を信じて母親の命を託すしかない。彼ならきつとやってくれろと。

クライドは座ったまま、

「アレックス、すまないが外に侍女を待たせてあるから案内を頼んでくれ」

「分かりました」

「え……あの、陛下は？」

少々嫌な予感が頭をよぎりながらも、セシリアはイヤミも込めてそう尋ねた。

「私はここに残る。そなたに色々教え込んでやらんとならんことがあるからな」

「！」

それと同時に尻を撫でられ、とっさに文句を言おうとした。

だがどす黒いオーラと鋭い光を宿したクライドに、セシリアはゾツと肌があわ立つのを感じ、ゆっくりと開きかけた口を閉じた。

「全く、余と結婚する身でありながら他の男に色目を使うとは。一体どのような神経をしているんだ」

ベッドに腰掛けてシャツのボタンを留めながら、クライドは呆れたように息を吐いた。

「す、すみませんでした……私の愛する世界で一番ステキな陛下様」

セシリアはシートに包まりながら、活力を失ったかのようにぐったりと横たわっていた。

”色目を使って”などいつもなら即刻抗議に出るところが、夜通し”教え込まれた”今では、もう食ってかかる余裕などない。

そんなセシリアを満足げに横目で見つめながら、

「これからアレックスと連絡を取るときには手紙を使え。きっちりとした字で書かんと、訂正付きで返ってくるぞ」

「冗談とも本気ともつかない言葉。

(手紙……?)とセシリアは思った。

「ですが私、便箋と封筒がありません」

それにクライドは怪訝な顔をする。

「そんなもの配達員が持っているのではないのか」

あなたを好きな女たちの嫌がらせで回ってこないんです、と言ってやるうかと思っただが、告げ口は彼女のポリシーに反する。やるならあくまでも直接対決がモットーだった。

何人だろうとまとめてかかって来るがいわ、と鼻息を荒くした。

「まあよい、用意してやるっ」  
「本当ですか!?!」

これで母親やドリーたちに手紙が書けるわ、とセシリアはホッと胸をなで下ろした。

「今すぐにそのシーツを取って余に肌を見せればな」  
(やっぱりタダじゃだめなのねッ!)

「余は優しいから、手で隠すのは許してやる。ほら、早くしろ」

期待した自分がバカだった、いや、やっぱりバカはこの王だとセシリアは思った。

(覚えていなさい!)

セシリアはイヤイヤ体を起こしながら、もう何度目か分からない心内宣戦布告をした。

セシリアの部屋から現れたクライドを、遠くからうつとりとした表情で見つめるものがあつた。

「医者を用意してやったお礼のキスぐらいしたらどうなんだ、セシリア」

「も、もう十分……わ、わかりました! ……これでいいですか」

「短い」

「あ、ちよつとんんつ……」

深い口づけを交わす二人……いや、セシリアを見据える彼女の目には、どす黒い憎悪が渦巻いていた。

## 第八話：配達員

「これからも母をお願いします”……っ！ ああ疲れたあ」

セシリアのゴミ箱の中には、丸めた便箋がたくさん入っていた。あの完ぺき主義な医者、アレックス宛の手紙。

丁寧に書かなくてはと思うばかり、手に力が入りすぎて書き損じてばかりいた。

「これで封をしてっ」と

最後の最後まで気は抜けない。ビシッとまっすぐにして封筒をとじた。

「完璧！ 配達員の人に渡さなきゃ」

時計を見ればちょうど午後を集配時間。タイミングばっちりね、とセシリアは手紙を持って扉を開けた。

だが開けた途端セシリアは叫び声を上げそうになった。今まさに探そうとしていた配達員が俯くように佇んでいたのである。

（え、何？ 真昼間から”出た”のかと思っただわ！）

十字をきりかけた手をそっと下ろす。

「こんにちは……セシリア様」と蚊の鳴くような声。

「私、城内で配達員をしております、ロゼと申します」

ペコリと頭を下げると、お下げが垂直になる。

「は、はあ」

(ずっとここで待ってたのかしら……)

ロゼは周囲を見わたすと、さっと部屋の中へ入ってきた。

「お手紙……私に渡しているところを見られないでください」と分厚い丸めがねの向こうが揺らめく。

「どうして？」

突然何を言い出すのかと首をひねった。ロゼは郵便バッグのヒモをギュッと握る。

「実はあなたの手紙……全部捨てさせられているんです。ここを出る前に」

「え？」

セシリアは驚きに眼を見開いた。

メイドのドリーの手紙をふと思い出した。確か“お暇ができれば、ぜひ連絡くださいね”と文末にそえられていた。

もう何通も出したはずなのに不思議に思っていたのだ。

(ああ、そういうことですか)

セシリアは鼻から大きく息を吐いた。

(私が王へ出す手紙を止めれば、向こうもこなくなると思ったのね？ 生憎陛下になんて一通も書いてないわよ！)

女同士の争いは姑息だと聞いていたけれど、ここまでとはと呆れる。文句があるなら正面からかかってくればいいのに。

「ごめんなさい！ 悪いことだつてわかってたのに……私、この人たちに命令されたんです！ 便箋や封筒も渡すなって！ 私は嫌だったのに……ごめんなさい！」

今にも泣き出しそうに、ロゼは頭を下げた。

「いいのよ、あなたは悪くないんだから！ そいつらはいつかまとめてとつちめてやるわ」

と握りこぶしを作る。それを見たロゼは儂げに笑った。

「セシリア様が羨ましいです」

「私が？ どうして？」

こんな落ちぶれ貴族の自分が羨ましいなどは、不思議なことを言うものだと思っただけ。

「強くて、優しく。そして何よりあんなにお美しい方に愛されてらっしゃって」

「お美しい方……」

陛下のこと？ とセシリアは嫌な顔をする。

あの人は自分を愛しているのではなく、遊んでいるだけ。

夜な夜な部屋に来ては、一人だけ楽しんで帰るような性悪王の一



体どこがいいのだろうと思った。こちらはストレスがたまる一方なのだから。

もうじきハゲるのではないかと案じていた。いや、むしろハゲて嫌われない。

「そ、そう？ よかったら代わってあげましょうか」

セシリアもむしろ代わってもらいたいとつくづく思う。だがロゼは意外な反応を見せた。

「そんな……いいんですか？」

頬を赤らめ、めがねの奥の瞳をきらめかせる。予想外だった。確かに代わってもらいたいのはやまやまだが、それが現実的なことかと言われればさしものセシリアもNOと言う。

それをこの自分と年の変わらない少女は、言葉通りに受け取ったのだ。

てつきり“何をおっしゃってるんですか”的な返答があると思っただのに。

(えっと……どうすれば?)と戸惑った。

「セシリア様！ 陛下が私を愛するように仕向けてくださいませんか！ 身分が低くても後宮には入れます。王妃にはなれなくとも、<sup>あいしゅりゅう</sup>愛妾くらいになら……」

「ま、待ってロゼ。それは本当の本気で言ってるの？」

ロゼはそれにあからさまに肩を落とした。

「無理……ですよ。私ブスだし。陛下もね、一度も挨拶を返してくれたことがないんです。私は毎日してるのに。陛下もブサイクは眼中にないんですよ」

「そ、そうじゃなくって！」

「いいんです。自分がどれだけブスかって分かってますから。根暗だし。失礼します」

「ちよつと待った！」

(そんなこと言われてそのまま帰せるわけないじゃない！)

ロゼの腕を掴んで引き止める。

「ロゼ、こつちへどうぞ」

彼女を化粧台の前へ連れて行った。

「さ、できた」

セシリアの手で着飾られたロゼは、別人のような変貌を遂げている。

お下げだった髪は後れ毛が可愛らしいハーフアップにされ、花のようなクリップがワンポイントになっている。

ファンデーションもつけていなかった顔にはほんのりとチークや口紅が施され、少し大人びた表情になっていた。

「わあセシリア様、お上手ですね」

「美容師さん雇うお金がないから、自分でやるしかなくて」

と少し自嘲気味に笑う。

「ロゼのめがねはダテだったのね」

化粧台に置かれためがね。今は完全に不要の産物と化していた。

「はい。めがねをかけていたほうが何だか安心して」

めがねを取った彼女の目はキラキラと輝きを放っていた。それにセシリアも喜びを覚える。

「ほら、キレイだわ、ロゼ！ ブスなんて思い込みよ」

飾り立てられたロゼは、信じられないと言いたげに自分の顔をさわった。

「そうだったみたいです。ああ私、きつとここの誰よりもキレイだわ！ かわいい……」

と鏡に映る自分自身に見とれる。

（見かけによらず、とんでもないナルシストね……）

確かに可愛くなったが、自分で自分をそう言ったりするものだろうかとセシリアは思った。

来たときとは比べ物にならないくらいの明るい表情を向ける。

「あの、またお化粧してもらえませんか。あ、このマニキュア可愛い！ くださいー！」

「え……ああ、ど、どうぞ」

「セシリア様よりきつと私の方が似合うわ……ふふ」

ロゼはピンク色のマニキュアを手に、また恍惚とした表情で鏡を見つめた。だがハツとしたように時計を見る。

「あ、ごめんなさい。もう行かなきゃ！　ありがとう」

「はあ、気をつけて……」

すっかり敬語も忘れてしまったらしい。

（自信がついたのなら、良かった……のよね？）

心にモヤモヤとしたものを感じながら、セシリアはそっぴいえば肝心の手紙を渡すのを忘れていたことを思い出してため息をついた。

「配達員だと？」

深夜。クライドにいやいや腕枕をされながら、セシリアは彼女の話を持ち出した。本当はベッドに入る前に話したかったのだが、クライドが先にさせると拒んでこなくなった。

疲れもあつて眠くてしかたがない。だがロゼが王に挨拶を無視されるのだと聞いて、とても気になっていた。

「そんな者に興味はない。知らん」とぶっきらぼうに答える。

どうやら挨拶されていることにも気づいていなかったらしい。

やっぱりと思いつつ、配達員に「おはよう」などとさわやかに挨拶

拶を返す彼の姿はちよつと想像がつかなかった。

「でも彼女が毎日のように手紙を届けてくれるんですから、知らないことはないでしょう?」

「ああいう制服組はどれも同じ顔に見える。そなたのように特徴的なら覚えやすいんだが」

セシリアは寝ぼけながらも怒りはしつかりと覚えた。

「それは一体どういう意味ですかね」と齒を全てかみ締めながら抗議する。

「とにかく、陛下! 挨拶されたら返すぐらいなさつたらどうですか。人となりを疑われますよ、ただでさえ性格が悪いの……」

ハツとして口を塞いでももう遅い。

「ほう、余のことをそんなふうに思っているのか」

声のトーンが落ち、セシリアはしまったと思った。クライドはわざとらしくため息をつく。

「セシリア……気を遣って今日はここまでにしておいてやるつもりだったけど、まだまだ元気そうじゃないか」

「え……いい、いえいえとんでもありません」

クライドはゆっくりと体を浮かせ、逃げようとするセシリアの上にまたがる。どこからか出てきたヒモをチラチラと楽しそうに見せつけられ、血の気が引いた。

「へ、陛下すぐくステキー！ 今日是一段と髪型が決まっていますね！ もう、すばらしい！」

そんなごまかしが聞くはずもなく、クライドはセシリアにまたがりながらアゴを持ち上げて黒い笑みを浮かべる。

「泣いて詫びるがいい」

まるで死刑宣告のようなそれに、セシリアは体を凍りつかせた。

コンコンとノックされ、セシリアはあくびをかみ殺しながら扉を開けた。

「こんにちは！ セシリア様！」

それに眠気が吹き飛ぶ。またロゼの姿があった。昨日セシリアが施してやった通りの化粧と髪型。それに半ば強引に持って帰ったマニキュアも。

「今日陛下が初めて挨拶をしてくださったの！ オシャレをしたか  
いがあったわ、嬉しい……っ」

「よかったわね。まあ、男性はみんな可愛い子が好きだから」

セシリアも、まさかあの腹黒王が自分の言うことを素直に聞くとは思わずに驚いた。けれどロゼが自分のおめかしのおかげと思うなら、それに水を差す必要もない。

「ああ、きつと陛下もそのうち私を後宮へお入れになるわ！ その

ときはよろしく！」

「ま、まあそれは正直どうかと……」

だがもはやロゼの耳には何も届いていない。扉口からセシリアの部屋を眺め、パツと顔を輝かせた。

セシリアが止めるのも聞かず、勝手に部屋に入って香水のビンを手取る。

「これ可愛いですね！ もらってもいいですか」

「ち、ちよつと口」

「じゃ、失礼しまーす」

まるでそれが当然のごとく部屋を出て行く。

もしかして自分は、とんでもない人間と関わってしまったのではないか。

さすがのセシリアも少々呆然としながら、扉の向こうに消えたロゼの背中を見つめていた。

第八話・配達員（後書き）

あとがき

イライラッ……な少女（笑）



## 第九話：暗雲

午後の配達時間のころ。

コンコン。

セシリアは最近、そのノック音にイライラを覚えるようになった。理由はそう、あの郵便配達員ロゼのせいだ。化粧品やら小道具やら、最近は何も言わずに黙って持って行かれることまであった。これはもうビシツと言ってやらねばと意気込む。

「ああ、心なしか何だか頭痛もしてきたわ……」

少し熱もあるような気がしたが、大したことではないかと自己診断する。

大きく息を吐いて扉を開けた。

「口……陛下！」

見上げた先にいたのは、想像していた彼女ではなくクライドだった。不敵な笑みを浮かべながら彼女を見下ろす。

「遅いぞ貧乏貴族。貧乏なら貧乏なりに、もっと敏速に動いてみる。褒美に金がもらえるかもしれんぞ、やったな」

（く……この方もこの方ですけどねッ！）

引きつった笑顔を浮かべながら、

「まあこんなお昼間から。ところで私に何かご用ですか？」

クライドは悪魔的微笑を浮かべると、セシリアの手首を引っ張っていく。

「ちょちょちょ……っ！」

「用などこれしかないだろう」

クライドに乱暴にベッドへ放り投げられた。

セシリアが体を起こす間もなくその上にのしかかると、あたりまえのように首筋に顔をうめる。

「……何て最低な用事でしようかしら、陛下」

「最近いつものはどうした」

「え？」

皮肉っぽく返したそれに戻ってきたのは、あきらかに話の流れと食い違う問いかけ。

「いつもの」……とは？」

「香水だ」と首筋から顔を上げる。「変えただろう。余はこれではなくそちらの方が好みだ」

不満げに美しい完璧なまゆをひそめた。

その悩ましげな表情に少しドキリとする。

「ああ……あれですか」

あれはもうない。ロゼに持っていかれてしまったのだから。

セシリアとてあの香りがお気に入りだったのだが、新しく買うお金もない。だがそう言えば、またこの腹黒王に何を言われるか。

“小瓶一本も買えないのか”と自分のことのみならず一族全体を

笑われるに決まってる。セシリアとてアディソン家としてのプライドがあるのだ。

「私はこっちの方が好きなので」

「ダメだ。元に戻せ」

（ダメって何……！？）

「別に香水ぐらいなんでもいいではないですか。それに人の好みにまで口を出さないください」

「誰のおかげでアレックスのような有能な医者をつけてもらえていると思っているんだ？ それも医療費を払わずにな」

「くっ……」と眉間にしわをよせる。

何かといえば貧乏だと笑い、かとおもえば自分の思い通りにしようとする圧力をかける。

だがクライドは押し黙ったセシリアに満足したのか、

「分かったな。明日からは言った通りにしろ」と再び首筋に顔を埋めた。

「陛下ではなくアレックス様ならよかったのに」

「！」

それに空気が変わったのを感じた。

顔をあげて見下ろしてくるクライドの目には、明らかかな怒りと僅かな動揺が渦巻いている。

「……………何、だと？」

しまったと思った。深い意味があったわけではないとは言え、それはいくら何でも言っではいけないかった。それもこんな場で。

「あ、違、その」

「まさか……そなたはアレックスに気があるのか」

そう思われてもしかたない発言だった。何とか謝らなくては。

「いえ、ただあの方は陛下と違ってとても穏やかでお優しいですし、それに私の一族を見下したりもしませんから、ですからそれでそんなあの」

だが怒りの収まらないクライドは、一度強くセシリアをにらみつけた後さっさとベッドをおりた。

「もういい」

バアンツと扉が外れそうなほど強くドアを閉めて出て行った。

それにセシリアは（やってしまった……）とグラグラし始める頭を押さえた。

部屋を出たクライドは、広い廊下を踏みしめるように歩いていた。未だに怒りが収まらない。

「何と言う無礼な女だ……！ あのような場で他の男がいいだと？

まさかずっとそのように……………っ。処刑だ処刑！！」

だが彼女の言葉がやけに胸に突き刺さる。

『陛下ではなくアレックス様ならよかったのに』

本気でそう思って言ったのだろうか。だとしたら……………。  
ヒンヤリとした嫌な感情がうずまく。怒りのような強い憎しみの  
ような。

セシリアが他の男を慕っているかもしれないなど、考えもよらな  
かった。ここにいる女たちは全て自分に取り入ろうと夢中になって  
いるのだから。

会わせなければよかったと後悔の念すら覚える。

彼女を処刑すれば満足か？ いや、違う。

「全く……………」

「陛下、御機嫌よう」と女の声があったが、返す気にもなれずに無視  
した。だが“あの香り”がしてハツと足を止める。

急いで振り返ると、配達員の女だった。

「そなたその香水……………」

「え？」とロゼは目を丸くする。

唐突すぎるな、とクライドは考え直した。

「いや、そなた名は」

クライドがそう尋ねると、ロゼは朝日のようにパアアッと顔を輝

かせた。

「ロゼ……！ ロゼです！ ロゼ・ブラウン！」と前のめりになる。だがクライドはそれを耳半分で聞いていた。セシリアの言葉を思い出していたのだ。

『ただあの方は陛下と違ってとても穏やかでお優しいですし』  
どうやら彼女はそういった男が好きらしいと思量する。

思えばプロポーズ云々の前に、花の一本もプレゼントしてやったことがなかった。金に困ってもいるわけでもないのに。

彼女が自分のことをどう思っているのか分からないが、セシリアがああ言ったのも自分に少しは原因があったはずだ、とクライドは初めて反省の念のようなものを抱く。

あの香水はいつもつけていたのだから、本当は彼女も気に入っているのだろう。  
おそらく切らしたか、あの通りのおっちょこいだから落として割りでもしたのかもしれないと考えをめぐらせる。

それを、プレゼントをしてやろうと思った。いつもより少しだけ優しい言葉と一緒に。

「気に入った。その香水の名を教えてくださいませんか」

彼女はそれをどんな顔で受け取るのだろうか、淡い期待に頬を緩ませながら。

「本格的に頭があ……………」

翌日。セシリアはクライドに対し、初めての手紙をしたためていた。さすがにアレは男性の自尊心を傷つけたろうと反省を込めて。だがさきほどから頭がぼんやりとしていて、一体自分が何を書いているのか分からない。

「もう何かもう何でもよくなってきた……………」 『あなたのセシリア・ア  
デイソンより』……………と完成」

コンコンとノック音に顔をあげると、扉が勝手に開いた。どうせ彼女だろう。普段なら怒りを覚えるが、今は逆にありがたい。

「セシリア様！」

やはりそうだ。相変わらずセシリアがしてやったあの髪型と化粧をしている。明るい表情で物書き机に近づいてきた。

「ロゼ……………ちょうどよかったこれよろしく」

ロゼはそれをよく見もせず受け取ってカバンへしまう。

「ねえ聞いて？ 昨日いいことがあったの……………陛下に名前を聞かされたのよー！ それも今まで見たこともない優しい笑みを浮かべられていて。きっと私がそれだけ特別なのよー！ どうしましよう、き  
やー」

両手で自分の口を塞いで軽く飛び跳ねる。

「そう」と適当に返答する。体がだるくてそれどころではない。

「はあ……私もそろそろ後宮に入れるかしら」と物色するように部屋を見わたした。

どうやらキャビネットにあつた小さなガラスの人形に目をつけたらしい。

「かわいい」と勝手にポケットにしまう。

それにセシリアは頭痛を忘れるかのように、机に両手をつけて立ち上がった。

「いい加減にしてくれないかしら！ 毎日毎日私のものを取っていかなくて。欲しいなら自分で買えばいいでしょう？」

ロゼはキョトンとして首をかしげる。

「いいじゃない、たくさんあるんですもの」と両手を広げる。

「一体何がいけないの？」と肩をすくめる。本気で分かっていないらしい。

セシリアは大きなため息をついた。

「私がいつ“あげる”と言ったのかしら。知ってる？ そういつのを“泥棒”というの」

ロゼはそれに一瞬にして無表情になった。



そしてジワジワと怒りがこみあげてきたのか、怒り狂った犬のよ  
うな顔になる。

「泥棒”！！？ よくもそんな卑劣なことを言えるわね！」

「卑劣なことをしてるじゃない、現に」

「アンタはきつと後悔するわ！！ 私はもうすぐ後宮入りするの。

陛下に愛されて愛妾……いえ、正妃とせずとずっと大切にされ  
る運命なんだわ。だってあの方は“気に入ったって”言ってたもの

「あのね、現実的に考えて無理ですって。正妃は血縁が」

「うっせえんだよッ！！」

「！！」

突然口調が変わって思わず押し黙った。

セシリアも物怖じしない令嬢らしからぬ性格だったが、ロゼのあ  
まりの変貌ぶりとは俗な物言いに言い返す言葉を忘れてしまった。

「あの人はアタシに挨拶をしてくれるようになった！ アタシの名  
前を聞いてくれた！ アタシの香水まで気にかけてくださるようにな  
ったッ！ そして笑いかけてくださった！！ どう考えてもアタ  
シをお慕いくださってるッ！！ お前はただのお慰みものだけどな  
ッ！！」

それに……セシリアの中で切れるものがあつた。

言っただけの事と悪い事がある。

ヒトの事情も知らず、よくもそんな言葉が言えたものだ。自分  
より目上の者の言うことには大人しく従うくせに、一旦安全圏内の  
人間とみればどこまでも礼儀を知らない言葉を吐き散らかす。

セシリアの怒りは頂点に達した。

「ロゼ……言わないでいようと思ったけど、挨拶は私がするように陛下に献言した。香水は私がつけていたものだから気になったんだわ。あなたの名前はそのついで。あの方はその香りが好きだと言っていたから」

それにロゼはカミナリに打たれたかのような顔をした。少しずつ気にかけてくれると思った想いの人は、すべて目の前の女に繋がっていたことに激しい怒りと嫉妬を覚えたのだらう。

「違う……違う……!!」

「別に信じなくてもいい」

ロゼはポケットにしまったガラスの人形を投げつけた。床へ叩きつけられ、ガシャンと割れて首が取れる。

「お前は地獄に落ちる！ この薄汚れた裏切りモノがッ……!!」

喚くだけわめくと、ロゼは扉を激しく閉めて出て行った。

「う、 “裏切り者”……って。ああ神よ、教えてください。一体いつ私が彼女を裏切ったのか……。だったらもう陛下と結婚でも何でも好きにしなさいよ。腹黒同士お似合いだわ……。いただだ、頭痛が」

セシリアはギリギリと痛む頭に手を当てると、掌に僅かに熱を感じた。

数日後、クライドは落ち着かない様子で執務室にいた。もう就業時間は終わっているが、自室に戻る気配はない。手には包装された小箱が握られ、少々緊張ぎみに室内をうろついていた。せつかく頼んでいた品が届いたというのに、まだそれを本人に渡し行く心の準備が整っていない。

「一体何と言って渡せば“優しい”んだ」

未だかつてそんな風にプレゼントしたことなどなかった。いや、そもそも身内の誕生日等義務のようなもの以外では、誰かにプレゼントなどしようと思っただけでもない。

だからこそ戸惑っていた。どうすればいいのかと。

だが分からないとはいえ、そんなことを誰かに相談するなど恥で死ねる。

そのとき、小さなノック音が部屋に響いた。

「誰だこんなときに」と小箱をデスクへ置き、舌打ちして扉を開ける。

そこにいたのは、郵便配達員口ゼだった。以前名前を聞いたが、クライドは香水の名前ばかりに気を取られて彼女の方のは忘れていた。

「何だ。午後の分の手紙なら受け取った」

「お話があるんです……」

彼女はそういうと、勝手に部屋の中へ足を踏み入れる。

「おい！」

許可もなしにそんなことをするなど、常人のすることではない。だが彼女はジツと俯いたまま、震えながら斜めがけカバンをぎゅつと握った。

「陛下……ずっと黙っていたことがあるのです。もう良心の呵責に耐えられません……っ」

「だから何だ」とイライラしながら言う。

「こ、こ、これを」

ロゼがカタカタと震えながら差し出したそれは、一通の手紙だった。

一体何なんだと思いながらそれを開けてみる。

「『親愛なるアレックス・ヘンリー・ベレスフォード様へ。毎日あなたのことを思うと、胸が苦しくてはりさけそうです。初めてお会いしたときから私はずっとあなたのことをだけ愛していました』……何だこれは」

カッと瞳目する。

「『……毎晩のようにあのような冷酷な王の慰みものになるなど、もう心が耐えられません。ああ優しいあなたの腕の中へ行きたい。一日も早くそれが実現することを願って。あなたのセシリア・アデysonより』」

「セシリア様に……これを届けると。そして黙っているとわれて、色んな品を握らされました」

弾かれたようにカバンから次々に品を出してデスクに並べていく。

「化粧品、髪留め、アクセサリ……香水も。でも私……陛下を裏切るなんて……本当はこんな欲しくないのに無理矢理……処罰は覚悟の上でございます！ 申し訳ございませんでした、あああああああつ……！」

そう言ってロゼは大声で泣き始めた。

クライドは手紙を握りつぶし、唇を震わせながら、デスクに乗った使いかけの香水と包装された小箱を睨みつけるように見つめていた。

## 第十話：クライドの怒り

「じっほじっほ！ あー……もうだめ」

セシリアは頭のふらつきと喉の痛みを覚え、ベッドに横たわった。多少熱もあるようで、額に当てた掌がジンワリ熱い。

「陛下に会ってからろくなことがないわ」

ここに来てからというものの、クライドに心も体も弄ばれ、拳句の果てには郵便配達少女に物を盗まれるなどという散々な日々が続いている。

『陛下ではなくアレックス様ならよかったのに』

だがそう言ってクライドを酷く怒らせた時のことを思い出すと、内心穏やかではいらなかった。少し傷ついていたようにも見えた。

「どうしろっていの」

謝るといふ選択肢はもちろんセシリアの頭に浮かんだ。だが日頃あれだけバカにしてくる男に対して、素直にそうする気など起きない。

（それにそもそも、私はあの人に嫌われようとしてたじゃない）

願ったりかなったり。

そう思いたいのに、あれ以来現れないクライドが気にならないと

いえば嘘だった。

(分かりましたよ、私が謝ればいいんでしょう?)

「呼んでいるのが聞こえんのか」

セシリアは肩をビクリと上げた。扉の前にクライドが腕を組んで佇んでいる。

「へ、陛下……！ いつからそこにいらしたんですか？」

「ここまでバカにされたのは生まれて初めてだ」

「はい？」

声の調子があまりにも静かだった。一挙手一投足に、どこか怒りを感じる。

かみ合わない会話に首を傾げつつ、こちらに近づいてくるクライドの顔色をうかがった。先日怒って帰ったのだからいつもの様子でないのは想定済みだが、もっと奥の深い怒りを抱いているように見えた。

クライドはセシリアの脇を通りぬけて背中を見せた。

「アレックスをお前の母親の主治医から外した」

「え……」

セシリアの双眸がゆっくりと見開かれる。

振り返ったクライドの表情には、いつものようなからかいはなかった。

「なぜです……なぜそんなことを！」とクライドに詰め寄る。

「そなたが悪いのだろう」

クライドはそう言って彼女の足元へ手紙を投げつけた。

クライドの目を睨みつけるように見すえ、セシリアはかがんでそれを拾い上げた。

便箋に踊る文字を見て口を開ける。言葉を発しようにも何も出てこない。

「こんな手紙知りません！」

やっとのことですう言った。

「ではあの郵便配達員の女が持っていたそなたの品物の数々は何だ。口封じにやったくせに」

「あれは全て彼女に盗られたんです！」

クライドは額に手をやり、頭を振りながら鼻で笑った。

「盗られただと？ 見え透いた嘘を」

「確におかしいと思われるでしょうけれど、あの子は本当に普通じゃないんです！」

「余の目の前で、真実を告白して泣き崩れた女が普通ではないと」

「陛下、あなたはロゼと私。どちらを信じるのですか」

どこかすがるような思いだった。

“自分が本当のことを言っているのだ”と証明する術を知らない。あれほど数々の品物を、犯人を知りながら黙って盗まれていたなど、普通は信じないだろう。

香水の件も“使い切った”ということにしていたのだ。なのに今更盗まれたと言っても……。



だが夜まで共にしてきた自分と一介の郵便配達員たる彼女の言葉となら……どれだけ不利な状況下だろうと、自分を選び、信じてくれてもいいだろうとセシリアは思っていた。

だが、クライドはあくまで冷徹な眼差しを引き下げようとはしない。

「そなたを信じようとした余が愚かであった」

その一言で、セシリアは何かが抜け落ちてしまったような感覚を覚えた。どこか諦めに似たような。

言い返す気力もない。

クライドが黙って部屋を出て行くと、セシリアは傍のソファーに腰を下ろした。

正直なところ、クライドにどう思われようともいい。ただ

「お母様……」

セシリアは両手で顔を覆い、肩を震わせた。

医者を外されたとなれば、母はまた病気で苦しむことになる。もしかしたら治りかけていたかもしれないというのに。

どれだけ屈辱的であろうと、彼に“信じてください”とすがればよかったのだろうか。

「なんて、私がおいおい泣いているだけの女だと思ったら大間違いですからね！」

どうやら彼女は涙ではなく怒りに打ち震えていたらしい。体の不調も忘れて鬼の形相で立ち上がった。

「もう嫌！　こんな腹黒たちの巣窟、抜け出してやるわ！」

寝室の扉を開け、大きな風呂敷に服やら宝石やらを包んで荷造りを始める。カバンが欲しいところだが、生憎パーティー用の小さなものしかない。

だがこれも前々から立てていた脱出計画の一部だった。大きなカバンを用意して怪しまれても困る。

元々嫁入り道具らしい道具も持ってきていなかったため、すんなりと荷を包み終わることができた。

それを小脇にか抱え、クライドに販された地図を手に決意に満ちた表情で立ち上がる。

「お母様、お医者様の件は、私がきつとなんとかしますから」「ねえ」

それにセシリアは再びビクリとした。

どうやら荷造りに夢中で注意散漫になっていたらしい。

現れたロゼの姿に、セシリアは警戒するように包みを握りしめた。

「どの顔を下げて私に会いに来たの？　陛下に嘘までついて」

「嘘って？」

ロゼはまだ何か持っていてこうなのか、セシリアの部屋を物色するように見渡す。

「あの手紙、あなたが私の字をまねて書いたんでしょう？　ロゼあなたって本当に……」

「私、後宮へ入ることになったの」

可愛らしいガラスキャビネットの中にあつた置時計に目を止め、それを手に取りながらロゼはそう言った。

「はい??」

「それでね、目標を達成しちゃってからハッと我に返っちゃって。ああ私、あなたになんてヒドイことしたんだろって」

後宮入りが決まったからなのか、どこか上品なそぶりでセシリアに向き直ると小さく肩をすくめる。

「何を企んでいるの」

彼女が改心などするはずがない。セシリアはそう思っていた。置時計とて、しっかりと彼女のカバンの中へしまわれているのだから。

ロゼはおかしそうに笑う。

「まあ確かに私のためといえはそうね。結婚と言うことになれば、神の前で誓い合うことになるもの。罪を背負ったままっていうのもね」

ロゼは鏡に映った自分自身に笑いかけ、髪をなおして振り返る。

「だからこれはせめてもの償い。あなた、ここから出て行きたかったんでしょ? 私がその手配をしてあげたわ。川を下って帰るための船もね。お城の裏手からなら誰にも見つからずにここを出ることができるわ。これであな家は家に帰れるし、私は罪の償いができる。一石二鳥じゃない」

(本音は私が目障りで追い出したいわけね)とセシリアは直感的に思った。

「悪いけど、あなたの手は借りないわ」と扉へ向かう。

「ここへ来て以来、後宮から出たことがないくせに、どうやって外へ出る気?」

それに足を止めた。

ロゼは地図の書かれたメモを差し出してくる。

「受け取って? 心配いらないわ。私はもう欲しいものを手に入れたんだから。ね、セシリア様」

さんざん悩んだ挙句、セシリアはそのメモを受け取ると、後ろを振り返ることなく足早に部屋を出て行った。

「さようなら、セシリア様」

窓の外は、黒く分厚い雲が天空を覆っていた。

「北? 北ってどっちなの?」

セシリアはメモに書かれた地図をクルクルと回しながら、目標地点へと向かっていた。

額にポタリと雫が落ちてきたのをきっかけに、ゆっくりと雨が降り出す。

だが今更引き返すことはできなかった。

「帰るには河の方へ行かなきゃいけないんじゃない？ 山の中に入ってる気がするんだけど」

方向はよく分からないが、ランドマークを頼りに間違えることなく進んできたはずだ。天候のせいで人々はどこか慌しく、それに乗じてすんなり脱出できた。

だがどんと人気のない森の中へと入り込んでいる。確か彼女は城の裏手から逃げられると聞いていたはずだが、どこだというのだろう。

整備された道はとうになくなり、獣道のような足場の悪いドロ道を歩いていった。

「ここはどこ……」

強い雨のせいで右も左も分からない。周囲は高い木々が空を覆うように茂っていて、最早城の方向すら分からなくなっていた。

雨あしが徐々に強くなってくる。忘れていた体調不良が、いまはつきりと彼女に異変を訴えかけていた。苦しいのに呼吸がうまくできないう、体は震えるほどに寒く、頭は割れるように痛かった。

おまけにヒドイ耳鳴りがして、ザーザーぶりの雨音すら遠くに聞こえる。

「い、一旦引き返さなきゃ……」

カッと雷の閃光が走り、ドオンと空気が震えるような落雷があった。

「きゃー！」

それに感覚を狂わされたのか、セシリアはドロの中へビシヤリと倒れこんだ。

ぬるぬるとした感覚に手も膝も滑る。

「はあ、はあ……苦しい……もう、だめ……」

起き上がる気力も、雨宿りをしようということに頭も回らない。とうとう頬を地面にくっつけた。跳ね返った雨水が口の中へ入る。

「お母様、ドリー……みんな……ごめんねっ」

強気な彼女の流す一筋の涙が、ゆっくりと地面に溶け入った。

クライドは荒れる空をじっと眺めていた。景色を見るためというよりは、ただぼんやり考えごとをしているように見える。

心ここにあらずという佇まいで、魂の飛んだ瞳でガラスの向こうを見つめていた。

「陛下、あの……何と申し上げればいいのか……ご心痛お察しいたします」

手紙を届けに来た口ゼは、そんなクライドの背におずおずと声をかけた。

あくまでしおらしく。あくまで被害者なのだといったげに。

クライドは大きく息を吐き出すと、振り返って机に両手をバンと叩きつけた。

「もういいー！」

引き出しからセシリアにプレゼントしようと思っていた香水の箱を取り出すと、それを持ってずんずんと部屋を出る。

「へ、陛下！ あの、どちらへ？」

まるで存在を無視するようなクライドの後を、ロゼは急いで追いかけた。

「陛下……あの、陛下？」

背の高いクライドを必死に見上げ、ロゼは自分で“飛び切りいい”と思うような笑顔を作る。

だがクライドは「手紙なら置いておけ」と足を止める様子はない。

「いえ陛下あの……私はいつ後宮へ？」

「後宮？ いつも出入りしているだろう？」

「そ、そうではなく」

ロゼは焦ったように目をしばたかせた。

「だって陛下、私あなたに真実を伝えて、あなたをあの女からお守りしたのですよ？ 褒美に後宮に入れてくださったりするのでしょ  
う？ ね？ あの、陛下？」

さわがしいロゼにクライドは足を止めた。

訝しげな表情でロゼを見つめる。

「お前」ごときが後宮に入れるわけがないだろう、郵便配達員」  
「……え？」

さも当然のようにそう言われ、名前すらも呼ばれなかった。  
目が落ちそうなほどに丸く開け、ロゼは呆然と立ち尽くしていた。

「セシリア！」

クライドは扉を蹴破るようにセシリアの部屋へ入った。あたりを見渡して、目的の人物を探す。

「母親にもう一度医者をつけて欲しかったら、今すぐ余の足元にひざまずいてこのたびのことを詫びろ！　そして死んでも余だけを愛し続けると誓え！　そうすれば手紙のことなど全て忘れて今まで通りにしてやる」

だがセシリアの姿はどこにもなく、無遠慮にもシャワー室も覗いたが中は空だ。

「セシリア！　どこへ行った！　おい！　貧乏貴族！」

寢室の扉を開けて息を呑む。開きっぱなしのクローゼットや引き出し、彼女が持ってきたらしいものが全て姿を消している。

「セシリア……」



クライドは反射的に窓の外を見上げた。分厚い雲からはバケツをひっくり返したような雨が降り注ぎ、腹に響くような雷が何度も轟いている。

このあたりは一度嵐になると風や雨や雷が怒り狂ったように入り乱れ、この世の終わりかと思うような天候へ変貌する。ここに来た使用人はまず、嵐が止むまで外には絶対に出るなということをお教わるくらいだった。

妙な胸騒ぎがしたクライドは、来たとき以上の勢いで部屋を出て行った。

## 第十一話：嵐の中で

「今すぐ馬を用意しろ！」

クライドは侍者に雨除けのロングコートを羽織らせるよう命じると、何の騒ぎかと集まってきた家臣らへそう申しつけた。

赤や緑の貴族服を着た側近たちは、焦ったように顔を見合わせる。

「陛下、外はこのような悪天候です。一体どちらへ……」

「うるさい！ 早くせぬか！」

「ひええ！」

彼の剣幕にますます怯え、まるで発言権を押し付けあつかのよう  
に背中を押し合う。やがてはじき出された一番下の者が、顔を真っ  
青にして口を開いた。

「おおお、恐れ入りますが、馬はみなこの豪雨と雷に怯え、ろくに  
前に進むことすらできませぬ。どどどどうかせめてこの嵐がやむま  
で……」

「余に指示するのか」と睨み据える。

「も、申し訳ありません！！」

役に立ちそうもない彼らに舌打ちし、クライドは外へ通じる木の  
扉を開けた。一気に雨が混じった風が吹き付けてくる。

「セシリア……」

「へ、陛下、お待ちください！ 陛下あ！」

嵐をものともせず突き進むクライドの後を、家臣らも白いカツラを飛ばされながら衛兵たちと共に追いかけて行った。

「セシリア！ セシリアああ！」

真つ黒い雲が終末思想を駆り立てるかのように空を覆っていた。風雨はますます強さを増し、全く衰えを見せない。土地勘のあるクライドですら迷ってしまいそうなほどに、外はその普段の穏やかな様を一変させていた。

灰色のカーテンが下ろされたかのように前が見えず、声も雨にかきけられてしまう。

雨除けのコートなど、豪雨を前に何の意味もなしてはいない。まさにびしょ濡れだった。

どれくらいの間が経ったのか分からなかった。水を吸った服が重い。ぬかるみが急く歩みを邪魔していた。切り立った山に囲まれた土地柄のせいで、かなりの傾斜が続く。

衛兵らは彼を見失ったのか、後ろに誰かがついてきている様子はない。たった一人でセシリアを探し続けた。

「セシリア！ セシリアああ……！」

声は枯れ、体力は随分と消耗されていた。雷は激しく降り注ぎ、いつ彼を直撃してもおかしくはない。それ以前に、もう歩くことからままならないほどに足が震えていた。強い雨は彼の呼吸すら妨げる。

クライドはついに両膝を地面についた。ビチャリと泥が跳ねる。セシリアが城の外へ出たとは限らない。だが言い知れぬ恐怖が渦

巻く。

「セシリアあああ！」

彼のかすれた叫びが響いた。

季節に関係なく、山の中はかなり肌寒かった。加えて雨が体温を容赦なく奪い去る。

このまま朝まで見つからなければ、彼女は……そしてかなりの体力を失っているクライドも無事では済まない。

分かっているにも、引き返すなどという選択肢はなかった。再びフバリと立ち上がる。

見つけるまで、山を駆けずり回る覚悟だった。夜通しでも走り続ける。

「セシリア……そなただけでも助けてみせる」

そう一歩踏み出した瞬間、目の前に何かの塊が見えた。疲れを忘れ、弾かれたように走って駆け寄る。

「セシリア！」

だがそれはセシリアでは無かった。親とはぐれたのか、一匹の小さな子ぎつねが丸くなって震えている。

「ちっ！」

期待した分、クライドはより強く落胆した。

「貴様など用はない」

見捨てて進もうとする彼の足に、子ぎつねは必死にしがみついた。

「邪魔なキツネめ！」

キツネなど、狩りの対象ではない。愛らしいその子にまわりつかれようと迷惑でしかなかった。

蹴り飛ばそうとする足をふと止める。震えるその姿が、なぜか彼女とダブって見えた。セシリアもこのように雨の中、体を震わせているのかと思うと怒気はみるみるうちに削がれていった。

それにその子の親も、もしかすれば自分たちが狩ってしまったのかもしれないと柄にもないことを考えてしまう。

「……勝手にしろ」

言葉が通じたかのように、子ぎつねは嬉しそうに飛び跳ねる。

「おい、どこへ行く！ おい！」

言ったそばから子ぎつねは森の中を駆けていった。

「待てと言っているだろう！」とその子をつまえた。

「これ以上邪魔をするなら崖から投げ落とすからな」

本気とも冗談とも取れぬ恐ろしい脅しをかける。だが子ぎつねは急に大人しくなって、じつとどこか一点を見ていた。クライドもそちらへ目をやる。

「……！ セシリア……」

まぎれもない彼女の姿がそこにあった。

「セシリア！」

急いで駆け寄り、泥の中に横たわるセシリアを抱き起こす。

「はあ……は……あ」

浅い呼吸を繰り返す彼女は、この寒さの中まるで赤い石炭のような熱を持っていた。

「セシリア……」

顔の泥を拭ってやる。これほど体は熱いというのに、彼女はガタガタと寒さに身を震わせていた。

「お母……さま」

「……セシリア」

熱に浮かされ涙するセシリアを丁寧に抱え、クライドは嵐の中を引き返して行った。

ベッドに苦しそうに横たわるセシリアを見つめながら、クライドは沈痛な面持ちでその手を握っていた。

「どんどん衰弱しておられます」

嵐が収まってから招集されたアレックスがそう告げる。風雨は止んだものの、空はどんより薄暗かった。

「今夜が山かと」

クライドは弾かれたように顔を上げた。

「何だと……セシリアは助かるのだろうか！」

椅子から立ち上がり、アレックスの胸倉をつかみあげる。

「分かりません。手は尽くし」

「分からぬだと？ アレックス、そなた医者ではないのか！ なぜ助けられない！ そなたもほかの無能な医者と同じなのか！ 手を尽くしたのなら助かるはずであろう！ 助かると言え！」

憎しみすらこもったそのままざしに、アレックスは目を伏せた。

「言いすぎた」と胸倉から手を放す。

「陛下、あなたもお休みになったほうがいい」

アレックスがそう言うのも無理はなかった。土砂降りの中を駆けずり回り、氷のように冷たい雨に打たれ、クライドも不調を覚えていた。顔が赤く、妙な汗をかいている。

だが彼はそれに素直に従おうという気はないようであった。ずっとセシリアに付きっ切りで片時も離れようとはしない。

セシリアのベッドのそばの椅子に再び腰かけ、彼女の熱に震える手を、まるでそれが宝物であるかのように握りしめる。

「アレックス。そなたに余はどう見えている」

熱のあるクライドさえも“熱い”と感じるセシリアの手を頬に当て、クライドは突然そんなことを尋ねた。

アレックスは次の言葉を待つように、静かにクライドを見つめる。ひどく哀愁を帯びた、辛そうな横顔が見える。

クライドは続けた。

「余はたとえ貴族だろうと庶民だろうと、気にくわぬ者は断頭台へ送ってきた。ひと月に何人も処刑していたこともある。その中にはそなたが命を救ったものもあつたかもしれぬ。民らの余に対する評価も知っている。だがそれを間違っていたなどと思つたことは一度もない。ただ思うのは」

声が震える。

「人の命とは、これほどまでに重いものだつたのだな」

苦しい実感だつた。体温より熱い涙がゆっくりと頬を濡らす。

「陛下……」

「その重さに胸が押しつぶされそうだ。壊れそうなほどに。余が次々と処刑を命じてきた人間にも、このように思う者があつたのだろうか。何も出来ぬ無力さを感じながら、身を裂かれるような生き地獄を味わう者があつたのだろうか」

苦しみが一言一句に込められていた。愛する者へ訪れようとすする死の恐怖に、クライドの中を剣で突き刺されるような激痛が走っていた。



「城の者がよく話していた。いつか母なるキリー河が贈り物として心優しき王妃を授けてくれるだろうと。その者が余の心を癒し、平和な時が訪れるだろうと」

それは王妃道の贈り物と呼ばれていた。単なる妄想の産物と思っ  
ていた。

だが彼女は現れた

「何を莫迦なと思っていた。だが余も心のどこかでそんな存在を求めていたのかもしれない」

森の中で親を見失った小さき獣を助けたのも、悪くはない感覚だった。以前の自分からは想像もできないこと。知らず、何かしらの影響を彼女から受けているのだろう。

「しかし……神は贈り物ではなく罰を与えようとしているのかもしれない。余のなしてきたことに対して、あまりに命に軽薄であった余に神が報いを受けさせようとしているのかもしれない。もしもそうだとしたら……余は」

「罰を与えるために誰かの命を奪うなど、神は決してなさりません」

アレックスの凜とした、とても静かで力のある声がクライドの胸を打った。

激しい自己に対する憎悪が幾分か薄くなっていく。愚かにも、もしかして自らを犠牲にすれば彼女は助かるのではないかなどと思っ  
ていた。

「セシリア様の生きようとする力を信じましょう」

穏やかな笑顔に励まされるように、クライドはセシリアの手を絶対に離すまいとするように固く握った。

久々の青い空だった。城の周囲をいつもの穏やかな風が河を撫でていく。

「ん……」

セシリアは一度ギョツと目をつむると、ゆっくりと瞼を押し上げた。視界がぼんやりとしている。

「セシリア様……大丈夫ですか」

「あれ、私、山の中で苦しくなって……?」

自分を覗き込む美しい男の顔に飛び起きる。

「神！ 神がお迎えに来られたのね！ そんな！ 私はまだまだやり残した仕返しだ」

「えっと大丈夫……と認定させていただいてもよろしいですか？」

「あれ？ アレックス様」

セシリアは一体どうなったのかと周りを見渡した。確か自分は城を抜け出したものの、山の中で迷子になって気分が悪くなって……そこからの記憶がない。

だがここはどうかやら城の中らしい。ふかふかのベッドもクローゼットも何もかも自分が使っていたものだ。

いつの間に戻ってきたんだろうと首をかしげた。それになぜ自分

の部屋にアレックスの姿があるのかと。

「よく頑張られましたね」

アレックスはかなりホツとした様子だった。

「いえ、きっとアレックス様のおかげです」

少しまだ頭が重い、城を抜け出そうとしていた頃より随分と調子がいい。それにお腹もすいている。

「あ、そうだアレックス様！ あの、母は！ 母の容体はいかがです？ 治療は順調に進んでいますか？」

それにアレックスは苦笑する。

「四日間昏睡状態で、目覚めの一言がそれですか？」

「よ、四日！？」

まさか自分がそこまで酷い状態に陥っていたとは思わず、どこか他人事のようにも感じられた。

「ご、ご迷惑をおかけして」

「いえ、それよりセシリア様」とアレックスは深刻そうな空気をまとう。

それにヒヤリとした。

(何？ もしかして何か重大な病気でも発覚したの……!?)

怯えるセシリアに、アレックスが口を開く。

「引き出しやクローゼットの扉をあけっぱなしにしておくのはいかがかと思います。それにドレスも色分けして収納されることを強くお勧めいたします。見た目が美しくないでしょう。生活の乱れは体に出ると前にも申し上げたというのに」

それにベッドからずり落ちそうになった。

(それって四日昏睡していた人間に“今”言うべきこと!?)

それを言い出す直前で飲み込む。母親が世話になっている彼にはセシリアもどこか弱かった。

キュツとベッドのシーツを握りしめる。クライドが母親の担当を辞めさせたと言っていたことを思い出していた。

「アレックス様、今日まで母にしてくださってきたこと、感謝いたします」

アレックスはカルテに何か書き込みながら天使の微笑みを見せる。

「まるでそれが終わってしまうかのような言い方ですね」

「え、だってあの……」

セシリアがすべて口にする前に、扉が開いた。

姿を見せた人物にウンザリするかのよう、セシリアはわざとらしくため息をつく。

「セシリア……」

クライドは口元を震わせ、こぼれそうになる涙をこらえるかのよう  
に眉をひそめた。だがそれを気取られぬよう、大きく息を吐いて  
咳払いをする。

「そなた……心配させるな！」

ずかずかと部屋に足を踏み入れ、彼女に近づく。

「全く、一体何日眠りこけていれば気が済む！ 頭の中が溶けたの  
ではないか？」

「はい？」

(四日も昏睡していた人間が目覚めたのに、何て言い草かしら)

だが彼女には不思議な感覚があった。ずっと夢の中で誰かに名前  
を呼ばれていたような感覚が。それに導かれるように目覚めに近づ  
いていったような。

(まさか……)

一瞬、それがクライドだった気がして首を振る。彼がそこまで自  
分のことを案じるなどとは思えなかった。

「陛下、セシリア様はもう心配いりませんよ」

「余は別に心配など……」

「そうですか。では私は一旦これで」

「あの、ちよつとアレックス様！」

二人きりになどされたくないというのに、アレックスはにこやかな  
笑みを浮かべて扉の向こうへ姿を消す。

セシリアは微妙な空気に居心地の悪さを覚えていた。

(お城を脱走したこと、怒ってるんでしょね)

ベッドのわきに置かれた椅子に腰かけるクライドの方は見向きもせず、景色を見るためというわけでもないが反対側の窓の外へ視線をやっていた。

「これをやる」

“何を考えているんだ貧乏貴族”、“馬鹿な真似を” などと言われると思ったが、予想外の言葉にセシリアは振りむく。

クライドは何か小さな箱を手渡そうとしていた。それにセシリアは苦虫をかみつぶしたような顔をする。

「そのやけにシワシワの包装は嫌がらせですか？」

「黙れ。大人しく受け取れ」

「何だかシミもついてるし。虫でも入ってるんじゃないですか？」

「く……っ。いらんのならもういい！」とクライドはそれをゴミ箱へ放り投げた。

まさかセシリアが寝込んでいる間、クライドがそれをずっと握りしめていたなどセシリアには知る由もない。

加えてセシリアはクライドにひどく失望していた。彼はあの時自分を信じず、責め立てるだけで話を聞こうともしなかった。

(やっぱり私は陛下にとって、ただの暇つぶしの玩具だったのね。信じる価値もないような)

怒りなのか悲しみなのか分からない。ただひどく疲れを覚えてい

た。

「それよりももっと欲しいものがあります」

重々しく口を開いたつもりだったが、口調は平静そのものだった。

「何だ」とクライドもなんともなしに答える。

セシリアはしっかりとクライドの両目を見つめた。

「今すぐ家に帰る許可をください。……もうあなた様の顔も見たくありません」

セシリアのいつにない真剣なまなざしに、クライドは言葉を失った。そんな彼をしり目にセシリアはさっさと荷造りを始める。

クライドは片頬を震わせ、視線を泳がせた。

「セ、セシリア、何を言っている。聞け。確かに今回余は」

「あーはいはい、お母様のことならご心配なく。あなたに頼ることなく自力でお医者様を探します。ここへ大人しく来たのだから、元々はお母様のためだけでしたし。治療費も必ずお返しします」

「そんなものはいらん！ セシリア、余は」

「さようなら、陛下」

有無を言わせぬ彼女の物言いに、クライドはただ着々と荷物をつめるセシリアを見守ることしかできなかった。

## 第十二話：久々の再会

「よろしいんですか？ 陛下」

アレックスは、腕を組み壁にもたれながら窓の外をのぞむクライドに声をかけた。

その視線の先には、乗船しようと棧橋を渡るセシリアの姿がある。

「このままセシリア様を行かせて」

あれから数日後。クライドはセシリアの願いを受け入れ、家へ帰すことに決めた。彼女は一度も振り返ることもなく、城を去っていく。

クライドは、その後姿を寂しげに見つめていた。彼が森の中で拾ってきた子ぎつねも、クライドの足元に絡みつきながらどこかしみりとして見える。

「よろしいわけがないだろう」

彼の瞳には、深い憂いがあった。あれだけ美しかったサファイアブルーの瞳が、今は光を失っている。

「なら陛下、今からでも」

「今のセシリアに何をどう言っても無駄だ。あれは余に失望していた」

「それで。彼女を諦めなさると？」

アレックスの問いに、クライドは体を震わせた。



泣いている……のではない。

端正なその顔には、セシリアが悪魔と称す笑みが浮かんでいた。

アレックスはやはりそうかとも言いたげにため息をつく。

「このまま、みすみす逃がしてたまるか……セシリア」

遠ざかっていく船をつかむかのように、クライドはこぶしを握った。

久しぶりの故郷に、セシリアは馬車の外をのぞきながら胸を躍らせていた。この道、この風景。

それほど長い間離れていたわけではないのに、やけに懐かしい気がする。

「セシリア様！」

馬車を下りると、屋敷の玄関前で待っていたらしいメイドのドリーと執事のアルバートが出迎えた。目を潤ませて駆け寄ってくるドリーに、セシリアも両手を広げて抱きしめる。

「ドリー！ アルバートも」

本当に帰ってきたのだ。セシリアは今までの城であったことが、まるで一晩だけの悪い夢であったように感じた。

(ここでまたみんなと穏やかに暮らせるんだわ！)

平凡だった日々を愛おしく思う。

ドリーはセシリアから体を離し、表情を曇らせた。

「お聞きしましたわ。本当に、なんと申し上げていいか」

後宮に上がったものの、すぐに家に帰されたとあらば、世間からあらぬ疑いをかけられるだろうとセシリアは覚悟していた。

（でも、この家もお母様も。私一人で守るって決めたんだから）

全て一人で背負いこんででも。そう思ってクライドに帰郷を申し出たのだ。

何があるうとも、腹は決めている。

「ドリー、心配しないで。私がなんとしてでも」

「ご懐妊だそうですね！」

ドリーの輝く笑顔に、セシリアの思考回路が停止する。

「……………え？」

「一時はどうなるかと毎日不安でしたのに、もう、みんな本当に嬉しくて！」

後ろを振り返るドリーの視線を追うと、執事のアルバートもハンカチで目を拭っている。

ドリーは顔を曇らせたのではなく、どうやら感激して涙を浮かべているだけらしい。それも訳の分からない理由で。

「ちょっと待って。え？ 何の話……………」

妊娠など寝耳に水。混乱する頭を、何とか正常に戻そうと試みる。

「もう本当に屋敷中が沸き立ちましたわ。昨日なんてちょっとしたパーティーも開きましたのよ！ ご出産までゆっくり静養なさってくださいね」

「ままま、待つて。違うの、ドリー。私は静養に来たんじゃなくつて」

「ささ、お嬢様。お体にさわりますから」

アルバートまでもが話を遮り、いたわるように背中を押して屋敷内へ案内する。

(ななな、なにこれ！ どうなってるの！？)

事情を呑み込めないまま、ふらふらと玄関に入る。さっきまでの感動は完全に凍結し、もはや夢つつつの区別すら曖昧だった。

「セシリア様、ほら！ お城からもこんなにベビーグッズが」

玄関に山盛り積まれた玩具や英才グッズに、セシリアは徐々に事の発端を悟り始めていた。

(まさか)

思い浮かぶのはあの男の顔。すべてはクライドが仕組んだことに違いない。

(あの王め……っ！)

まるで不敵な笑みを浮かべるクライドに、崖から蹴落とされるかのような錯覚に陥った。

「奥様もセシリア様と赤ちゃんの帰りを心待ちにされておられますわ。私も勝手ながら、おばになったかのように感じております」

くすぐったそうな笑みを浮かべるドリーに、セシリアは顔を真っ青にした。

「お……お母様まで」

母親の休んでいる部屋に足を踏み入れるのが、これほど恐ろしいと思ったことなどなかった。

いったい何と言って説明すればいいのか。そんなことがグルグルと頭の中を回っている。

「セシリア！」

セシリアの姿を見ると、母のマイラはベッドから下りて強く抱きしめた。

その行動に驚く。

「お母様、お体はよろしいのですか!？」

いつも病床にふせがちだった母が、自ら出迎えてくれるなんてとセシリアは瞠目する。

「ええ。孫が生まれるんですから、寝てばかりもいられないでしょう? 見て? 毛糸の帽子と靴下を編んだの。冬は冷えるものね。性別が分からないから、イエローにしてみたんだけど、どうかしら」

今まで見たこともない母親の明るい表情に、セシリアは声を詰まらせる。

激しい頭痛を覚えてこめかみを押さえた。

(でも早いうちに言うておかないと、あとでもっと取り返しがつかない事態になるわよね……)

「お母様、ドリー、聞いて」と神妙な面持ちで二人に向き直る。「妊娠なんてしてません。本当に全部でたらめなの」

期待を裏切つてごめんなさいと深く謝罪しながら、セシリアはそう言い切った。

その場にいたドリーとマイラは顔を見合わせ、悲痛な面持ちで顔を伏せる。

「二人とも、せっかく楽しみにしてくれてたのに。ごめんなさい。でも、これが真」

「セシリア」

マイラは眉をひそめ、セシリアの頬に掌を当てた。

「確かに出産に対する恐怖や不安はあるとは思っわ。でも大丈夫。陛下がきつと支えてくださるわ。それに私たちも。ね、ドリー？」

「ええ。あれだけセシリア様の身を案じておられるんですもの。陛下をずっと冷たくて残酷な方だと思っていた自分を心から恥ずかしく思いますわ」

二人はセシリアが妊娠していると信じ込み、彼女の話には耳を傾ける様子がない。

それどころかあれだけ印象の悪かったクライドへの印象が一変している。

(ちょっと待ってちょっと待って！ どうしてそうなるわけ！？)

ドリーが歩み寄る。

「事情は分かっていますわ。初めてのことにセシリア様がひどく戸惑って、ご懐妊を認めようとなさらないと陛下からのお手紙に。それで今回の生家での静養を許可されたと。はあ、寛大なお方だわ」

(どこまで先手を打ってるのよ!!!)

とんでもない作り話に、セシリアは二の句が継げなくなった。確かに城へ行った初日から、毎日のように行為を迫られてはいた。だが、そう簡単に子供ができれば誰も苦労はない。

時々あった検査でも、ずっと陰性反応だったのだ。

「ここでゆつくりなさったら、きっとセシリア様もお子様の誕生が待ち遠しくなられますわ。ね？ 赤ちゃん」

ドリーはセシリアの空っぽのお腹に優しく触れる。

「はは……ははははは」

説得しようとは思わなかった。だが口から洩れるのは乾いた笑いのみだった。城から逃げてきたはずが、そう思っていたのは本人だけで、どうやら首輪に鎖までついていたらしい。

もちろん、その鎖を握っているのはあの憎らしい男。

「でも気を付けるのよ、セシリア」

マイラは不安げに影をおとす。

「気を付けるって……?」

「最近、妙な男たちが若い女性をさらう事件が多発しているそうですの」とドリーが付け加えた。

「誘拐ってこと?」

平和だったはずの故郷が、そんな物騒なことになっているとは。

「セシリア、お腹の赤ちゃんのためにも絶対に一人で屋敷の外へ出るんじゃないよ」

「は……はい」

母に強く釘をさされ、セシリアはぎこちなくうなずいた。

「どうしてすぐバレるような嘘をつくのかしら!」

離れてもクライドの掌で弄ばれている事実には、セシリアは歯噛みした。

「そもそもあの人の身から出た錆なのに、まだ私を離さないつもり? どこまで腹黒なのよ、あの王は!」

屋敷裏にある池のほとりから、思い切り石を投げ込んだ。石は小

さな水しぶきを上げて沈む。

「セシリア」

お腹にさわると言っただけで怒られるかと、セシリアはビクリとした。

「ウィル」

だが振り返った先にいたのは家の者ではなく、以前一族ぐるみで付き合っていた幼馴染の青年、ウィルだった。

身長は高いが体型はやけに細い。体が弱いせいか、それとも読書好きでめったに外に出ないせいか、肌の色も白いを通り越して幽霊のように青白い。

少し伸びた髪で目元を隠していることもあって、いつもどこかどんよりとしたオーラをまとっている青年だった。

「久しぶりね！ 元気だった？」

セシリアのアディソン家が衰退してからというもの、彼らの周りから次々と人が消えていった。所詮はお金や権力目当ての付き合いだったらしく、ウィルのブラックストン家もその中の一つ。

しかしウィルだけはしょっちゅうアディソン家に顔を出し、変わらぬ付き合いを続けていた。それをセシリアも喜び、損得勘定抜きで、数少ない本当の友人だと思っていた。

「うん。おば様のお見舞いに来てたんだ。セシリア、あの……赤ちやんが生まれるんだってね。おめでとぅ……」

（やめてお母様ー！ あの腹黒王のホラ話を拡散しないで！）



「どうかしたのかい？」

頭を抱えて左右に振るセシリアにウィルは首をかしげる。

「いえ……別に」

「そう。でもよかったね。競売で他人の手に渡ったこの屋敷も、きつと陛下が買い戻してくれるよ」

「え？」

セシリアはそれに息をのんだ。

(この家が……他人の手に!?)

ハツとして屋敷を見上げる。我が家に戻ってきたと思っていたのに、そこはすでに別人の家だった。家の者も母も、セシリアに気を使って黙っていたのだろう。

「そんな……」

「もしかして知らなかったの？ ごめん」

ショックを隠せないセシリアの反応に、ウィルは言うてはいけないうことを言ってしまったのだと、即座に謝罪した。

「でも大丈夫だよ、お優しい陛下がきつと」

「いいえ。私、本当は王から逃れたいの!」

クライドなら屋敷の一軒や二軒、自身のポケットマネーで簡単に買えるだろう。だがそんなことまでクライドに処理してもらえば、自分は確実に逃れられなくなる。

セシリアは何とか信じてもらえるように慎重に言葉を選びながら、

今までのことをかいつまんでウィルに説明し始めた。

「ひどい話だ。おば様の命を盾に君を手中に収めようとするなんて！」

セシリアの話に納得してくれたのか、ウィルは憤ったように顔を赤らめた。彼がここまで感情を露わにしていると、セシリアも初めて目にする。

「どうして僕に言ってくれなかったんだよ……僕ならきつと君の力になれた！」

「友達のあなたに負担をかけるなんてできないわ」

そう言ってまた池に石を投げ込む。

「今度こそ僕が君を助けてやる。君が陛下から逃れたいというのなら、僕が全力で逃がしてあげるよ」

「何言ってるの？ 相手は善良な市民さえ躊躇なく処刑するような王なのよ。国中を敵に回すようなものじゃない」

ウィルはグツとセシリアの両肩をつかんだ。

「と、友達である君のためなら、僕は何だってできる！」

いつもどこか覇気のないウィルの目が、このときばかりはランランと輝いていた。

「ウィル……」

その時、カサツと音がして振り返る。一瞬、何か影のようなものが見えた気がした。

「今、誰かいた？」

「え？ さあ？ とにかくセシリア、僕が何とかしてあげるからね！ 僕を信じて！」

意気込むウイルに、セシリアは笑顔でうなずいた。

### 第十三話：セシリア禁断の恋 (前)

「何が『愛しい妻と生まれくる子をよろしくお願いします』よ！」

母親あてに来たクライドの手紙をリビングのテーブルに叩きつけた。

この手紙のせいで、使用人たちまで巻き込んだひと騒動になっている。

ここへきて数日経過したが、三度の食事は野菜中心の体に優しいようなものばかりであるし、階段の上り下りですら心配そうに見届けられる。

挙句の果てには妊娠の喜びを綴った本を渡されたり、出産の痛みを軽減するという体操までやらされ、いい加減うんざりしていた。

それもこれもこの手紙のせいだ。

だがクライドの手紙は、嘘の妊娠に関する一通ではなかった。セシリアがここに帰って来る随分前から、アレックスが担当医として来る前からあった。

意外なことに、どれもセシリアの母の体調を気遣うような、誠実な文面が並んでいる。これが本心なのか意図的なのかどうか分からないが、この布石があれば誰でもクライドの真っ赤なウソを信じてしまっただろうと思った。

コンコンと玄関扉が叩かれる音が聞こえた。生憎使用人は誰もいない。

セシリアは急いで玄関に走ると、カチャリと扉を開けた。

「はい、どなた……アレックス様」  
「どうも」

そこにいたのは、白衣を持ってたたずむアレックスだった。いつもの優しい笑みを浮かべているが、どこか罰が悪そうにも見える。おそらくクライドに協力していることへの後ろめたさだろうとセシリアは思った。

「これは一体どういうことなんですか？ 私は妊娠なんてしてません……！」

玄関に招き入れながら、声を落として事情の説明を求める。

「まあ、言ってるうちですよ」

「こ、怖いこと言わないでください！ 私はもうあの方と縁を切ったんです！ 二度とお会いすることも言葉を交わすこともありません！ なのに……。アレックス様から母たちに真実を伝えてください」

アレックスは小さくため息をつく。

「あなたのお気持ちはよく分かる。でも陛下はあなたに出会って変わられた。以前のようないくつかの雰囲気はなくなり、近寄りやすい空気も穏やかになられた」

それがなんだ、と眉をひそめるセシリアに、アレックスは手紙を差し出しながら、

「まあそう結論を急がず」

執事に迎えられ、アレックスはマイラの元へと歩いていく。

セシリアはアレックスから受け取った手紙を開けた。

『すまない』 『帰ってきてほしい』

たとえそういう言葉が並んでいても、許す気はない。

そう意気込んでカードを取り出した。

『逃げてても無駄だ　　愛をこめて　クライド　』

「どこに愛がこもってんのよ！」

思い切り床にたたきつけた。

(ごめんなさいの一言もいえないのかしら!)

「セシリア？」

「ウィル！」

開いていた玄関から幼馴染のウィルが顔を出す。

「今の人は？」

「お医者様のアレックス様」

「まさか、陛下の命令で君を見張ってるの？」

「違うの。お母様を診療してくださってるのよ」

「そっか。けどお城での知り合いがいたら、息が詰まるだろう？  
町に買い物でも行こうよ、久しぶりに」

一瞬母やドリーが言っていた誘拐事件のことがセシリアの頭をよぎったが、まだ日も高いし一人ではないから大丈夫だろうと結論付ける。

「そうね！」

「……セシリア様？」

洗濯かごを持って階段を下りてきたドリーが声をかける。

「ちょっと町へお買い物に行ってくるね、ドリー」

「町って……」

「大丈夫よ、ウィルもいるし。妊婦は適度に運動しなきゃ」

都合の良い時だけクライドの嘘を利用し、セシリアは不安げなドリーを残して意気揚々と町へ繰り出した。

「久しぶりの故郷はやっぱりいいわねえ」

ご満悦のセシリアの両手にはヌイグルミや小物の入った袋が握られていた。ウィルが久しぶりに帰ってきた祝いにと、遠慮するセシリアにも構わず彼女が気に入ったものを次々と購入してやっていた。セシリアがお礼にラズベリーパイでも作ろうかと思っていたその時、

「いつにしようか」

不意にウィルがそう尋ねる。

「何が？」

「家を抜け出すんでしょう、陛下から逃げるために」

「ああ、うん……」

「準備はいつでもできてるからね。僕に任せて」

「ありがとう、ウィル」

微笑を浮かべるセシリアには、迷いが生じ始めていた。クライドから逃れたいのはやまやまだが、それが本当に正しいことなのかは分からない。

「セシリア、大丈夫？」

「え？ う、うん！」

どうやら随分ボウツとしていたらしい。照れ隠しにはにkindように微笑んだ。

「そつだ、ちょっと待ってて。すぐ戻るから」

そつ言つてウィルがどこかへかけていく。

「最近、陛下は穏やかだな。処刑の話も全く聞かなくなった」

どこかからかそんな声が聞こえてきた。見れば露店の前で雑談をする男らがいる。

（穏やか？ あれが？）

事情を知っているだけに、ハンと鼻で笑いたくなるのをどうにか抑える。

アレックスといい皆そろいもそろつて、彼のどこを見ているというのだろつかと思つた。あの腹黒のどのあたりが穏やかなのかご高



説明したい。

「城内も以前のような殺伐とした雰囲気はなくなっているらしい」「ほう、それではやはり、ついに王の心を癒すという王妃道の贈り物様が現れたというのは本当だったのか」

興奮気味に噂話は続けられる。

(王妃道の贈り物……?)

そういえばどこかで聞いたかもしれないとセシリアは記憶を巡らせた。それがどこかに行きつきそうになる前に、通りすがりの男に声をかけられた。

「すみません、シティーホールはどこでしょうか」

やけに顔色が悪い。

目は落ち込み、ひどいクマができていた。

「それならこの道路をまっすぐ行って……」

「どこですか？ こっちですか？」

「だから、この道をまっすぐ行って……」

そこでセシリアはハツとする。周りを、同じように顔色の悪い男たちに取り囲まれていた。直接的ではないが、遠くの物陰からじりじりと包囲網を作るかのように彼女を見つめている。

特に顔の上半分に包帯を巻いた男からは、濃い殺気のようなものが漏れ出ていた。

「何……?」

「セシリア！ これ、君に」  
「あ、ありがとう」

花束を持ったウィルが戻ってきた途端、彼らはどこかに姿を消した。セシリアに道を聞いていた男も、すでにどこにもいない。

「どうしたの？」

「ウィル、このあたりで若い女性を狙った誘拐が頻発してるって知ってる？」

「う、うん。新聞で読んだ」

「私、そいつらを見たわ。たぶん主犯の男も。顔の上半分に包帯を巻いていたからよく分からなかったけど、変な輩が私に襲いかかるうとするところをじっと見てた」

「もしかして……あいつ？」

ウィルが声を落として一瞬そちらへ目をやった。ウィルの視線の軌跡を追うと、あの男が食い入るようにじっとこちらを見ている。ゾワリと鳥肌が立った。

「どうしよう……ウィル！」

雰囲気明らかに異様なのだ。

「セシリア、おいで！」

ウィルはセシリアの手をひっぱると、人通りの多い道へ出る。その途中、セシリアはぬいぐるみの入った袋を落とし、拾おうと足を止めた。

だが不意に見た視線の先の男に、体が硬直する。

「セシリア、さあ！」

ウィルの力強い腕に引かれ、セシリアはやっとのことで足を動かした。馬に乗せられ、ウィルが後ろに乗って手綱を引く。

「大丈夫。もう、大丈夫だから」

次第に遠ざかっていく男の影。それにホッと息を吐いた。

「何だかミュージカルみたい」

「本当だね」

そんな冗談も口をつく。

「どこに行くの？」

「もしかしたら君は目を付けられたのかもしれない。とりあえず後を追われて家を知られないように、うちの別宅に行こう」

「分かった」

弱弱しいと思っていた幼馴染のウィルの逞しい姿に、セシリアはなぜかこそばゆくなった。斜陽の日もまぶしい。二人に後ろに、黒く長い影が伸びていた。

日が落ちる前に、何とか別宅にたどり着いた。

「すげーとこいるね」

足を踏み入れた邸宅は、町から離れた自然豊かな森にあった。しかし動物に荒らされることもなく、現在使われていないとは思えないほどに立派な姿を留めている。

珍しい調度品や絵画、石像が廊下や部屋にたくさん並んでいた。

「地下に面白いものがあるんだ」

誇らしげに微笑むウィルが、なぜか秘密基地をひけらかす子供のように見えた。

そのあとについて階段を下りる。セシリアは、幼少期に帰ったようなノスタルジーを感じた。

「ここ、ここ！」

石の階段は薄暗いが、小奇麗に掃除されている。おそらく彼の性格によるものだろう。

ウィルが開けた扉の中を見て、瞠目する。

「す……すごい」

中は地上の部屋と変わらぬくらい、いやそれ以上に素晴らしい作りだった。柔らかい絨毯、高級家具、オシャレに香まで焚かれてある。

今の今まで城の後宮にいたセシリアでさえも、息をのむほどに素晴らしい部屋だった。

「あのカーテンの向こうには何があるの？」

部屋を切るように下がる劇場の垂れ幕のようなものを指し、興奮気味に振り返った。そのとき、カチャリと小さな音が入ってくる。

「ウィル、あの……どうして、カギをかけたの？」

扉の前で、ウィルがやけに怖い顔をして立っている。

「セシリア、可哀そうに」

「な、何が？」

さつきからやけに心臓がバクバク煩い。それも異様なほどに。

「好きでもない男に抱かれて、体を穢されて、苦しかっただろう？  
僕がその穢れをはらって、きれいにしてあげるからね。それで君  
の純潔は僕のものになるんだ……」

「え、な、何言ってるの」

「穢れをはらうんだ。悪魔の痕跡を消さなきゃ」

「ウィル……」

危ない。逃げる。

本能がそう告げていた。一步一步ウィルが近づいてくるたびに、  
空気が張りつめていく気がする。

ウィルが天井から下がる紐を引くと、一瞬で明かりが落ちて真っ  
暗になった。

（嘘でしょ！？）

肩をすくめるセシリアの背後で、ゆっくりとカーテンがひとりで  
に開くと同時にオレンジ色の光がこぼれ始めた。

恐る恐る振り返ると、真ん中には天蓋つきの大きなベッドがあり、  
周りを何十本ものロウソクで囲まれていた。ベッドのわきにはセシ

リアによく似たマネキンが、ウエディングドレスを着て微笑んでいる。

その視線の先にあるゆりかごがユラユラと揺れ、目の大きい赤ちやんの人形が置かれてあった。

化粧台を見れば、写真立てに赤ん坊の人形を抱き、ウエディングドレス姿のマネキンの肩に手を回して微笑むウィルの写真がある。ダイニングテーブルの上には、二人分の料理と赤ん坊用のミルクが乗っていた。

明らかに、常軌を逸している。

「あ、や、やつぱり私、陛下のことすっごい好きなの〜！ これはあれ、痴話げんかってやつ？ 本当は妊娠もしてるの！ ああ、彼の子がすごく愛しい〜。だから私のことは……」

「裏切ったの？ 僕を。僕の心を試したんだ」

ウィルはとんでもなく絶望的な顔をする。

「試したって。そういうわけじゃなくってね、ウィル」

「ウルサああああイ！」

それに怯えて口をつぐんだ。

「……ごめんね、大きな声を出して。君とここで、温かい家庭を築きたいんだ。愛してるよ、セシリア。愛してる」

黄色い歯を見せ、にっこりと笑うウィルに、セシリアはゾツと背中が冷えるのを感じた。

かつて、これほどの恐怖を感じたことがあっただろうか。

「いやああああ！」

近づくウィルへ傍にあったものをやたら目ついたら投げつけ、それがウィルの目に当たって隙ができる。

急いで扉に駆け寄り、ノブを回すが開かない。

「何で！ 何で開かないの!?!」

何度も扉を引いたり押ししたりと、ガチャガチャ音を鳴らす。

「セシリア……どうして」

目を押さえたウィルが手を伸ばして近づいてくる。

「きゃあああ！」

鍵の存在を思い出し、それを開けて弾かれたように飛び出した。

「待って……！ セシリア！ セシリアああああ！」

（怖い、怖い、怖い！）

知っている幼馴染の顔ではなかった。

「冗談じゃないわよ！」

屋敷の出入り口まで駆け寄るが、そこで足を止めた。黒いフードをかぶった大勢の男らが扉をふさぎ、ゆっくりと彼女の周りを囲む。逃げようとするセシリアは腕をつかまれ、床に引き倒された。

「やめて！ 放して！」

抵抗するが体は動かない。冷たい幾本もの腕で肩や足首をがっちりと押さえつけられた。

ウィルが両手両膝についてセシリアに覆いかぶさり、恍惚とした表情で視線で彼女を愛撫するように見つめる。

そつと頬を撫でようと手を上げた。

「触らないで！」

そつ首を振るが、大勢の男らに押さえつけられている状況ではそれも効果がない。

「ごめんね、セシリア……でも僕、君とずっとずっと一緒にいたいんだ」

ウィルの右手には緑色の液体が入った注射器が握られている。それがいつたいたい何であるのか、考えたくもない。

「僕にはない強さを持った君が、ずっとずっと好きだった。冷酷な王の元から逃げて、ここで暮らそうね。可哀そうに。ずっと虐げられていたんだ。愛のない行為をされて。でも僕だって寂しかった。君が後宮へ行って、二度と手の届かない存在なってしまったかと思っただ。いくら君に似ていようと、代替品はやっぱり代替品だったし」

それにハツとする。

「今まで何人もの少女を誘拐してたのってあなた……？」

ウィルは答えない。だがランランと輝くその両目が、如実に真実



を語っていた。

「最低……っ！ 放して！」

いくら腕をねじっても、びくりとも動かない。

「無駄だよ。ここには誰も来ない。来たって僕の雇った傭兵たちが僕たちを守ってくれるんだ」

兵などと上等なものではない。明らかにおかしい男らだった。皆まっ白な顔にひどいクマを作り、血走った眼で無表情でセシリアを見下ろしている。

「愛してるよ、セシリア。一つになろう、大丈夫、優しくするよ。初めてだもんね」

注射器をちらつかせながらウィルは目を閉じ、ゆっくりと唇がセシリアへ寄せられた。

(……助けて……っ)

その時、扉が蹴破るように開けられ、暗い屋敷の玄関ホールに月明かりが差し込んだ。

「誰だ！」

周囲はにわかにセシリアも懸命に顔を上げる。

少し汚れたローブに、背中には荷物をくるんだ布を括り付けた、旅人風情の男が佇んでいた。顔の上半分に痛々しいほどに包帯を巻き、風にその端をなびかせる。

その凜とした姿がやけに綺麗に見えた。

「あ、あなた確か……」

町で見かけたあの男だった。誘拐の犯人だと思っていた、あの。

「邪魔をするなっ!」

ウィルの命令で一斉に男らが襲い掛かる。手にはナイフや鈍器を持ち、丸腰の旅人のもとへ突っ込む。

不安に体をこわばらせるセシリアの心配をよそに、旅人は流れるように男らを次々とかわしていく。

床に座り込んでいたセシリアの手首をつかみ、彼女を庇いながら屋敷を出て森の中へ突き進んだ。

「二人を逃がすな!」

ウィルの声が夜闇に響く。

二人は森の木々のわきをすり抜け、大木の影に身を隠して耳を澄ませた。今のところ、追いかけてくる様子はない。

「あなたは一体……」

呼吸を整え、いまだ手を掴んだままの旅人を見上げる。その時、彼の右腕に刃物で切られたような傷を見つけた。

「け、怪我を?」

セシリアは急いでハンカチを取り出すと、それを巻きつけた。闇でよく見えないこともあるが、彼女の乱雑な性格も相まってかなり

不格好な処置。

こんなことなら、アレックスの言うとおり、日ごろからキッチンとしておけばよかったと思った。

「あの、お名前は……？」

彼は微笑みながら自分ののどを押さえ、小さく首を振った。

(口が、きけないんだ……)

どうやってコミュニケーションをとろうかと考えていると、彼がセシリアの手を取った。

彼女の掌にL・Y・D・E・Cと指でアルファベットを記している。

「ライドック？ ライドック様……」

彼は小さくうなずく。再び掌に、

【手当をありがとう。危ないから、もう少しここにいたほうがいい】

男性の割に細い指先でそう書き記す。

「あの、でも……どうして私を？」

【君の連れの様子がおかしいから、ずっと見張っていた。君たちの周りに妙な男らもまとわりついてたし。間に合ってよかったよ】

「巻き込んでしまって、申し訳ありませんでした」

ライドックはセシリアを安心させるように、柔らかく笑う。怖い思いをしたセシリアは、それに癒されるような心地がした。

「そうですね、ずっと旅を」

ここまでくれば大丈夫だろうと、火を焚いて暖をとった。山の中はひどく冷える。満天の星空の下、肩を寄せ合ってこれまでのことを話した。

とはいえセシリアは自分が名家のアディソン家であることも、後宮にいたことも話せずにいた。彼には知られたくない。自分を見る目が変わるのでは、と怖かった。

【一人旅は危ないからね、自然と暴漢らへの対処法も身についた】

セシリアは、この強く優しい青年の笑顔にときめく自分に気付いた。

顔の半分は薄汚れた包帯で見えないが、細いあごのラインや形の良い唇から、とてつもない美形であるうことが見て取れた。

それよりなにより、包帯の隙間から見える美しい瞳に心をくすぐられる。

カサツと音がして、ライドックがセシリアを腕の中に抱き寄せた。その逞しい腕の感覚に、セシリアは顔に熱が集まり始めるのを感じる。

【大丈夫。動物か何かだったらしい】

「そ、そうですね」

顔の熱を冷ましながら、セシリアは平静を装って体を離す。

【どうかした？】

「いいえ……あの」

至近距離で目が合う。

それだけで、互いの気持ちが混じり合うのを感じていた。この世にまるで二人だけになってしまったかのように。

ライドックがゆっくり近づく。

セシリアは、ドクドクと煩い心臓をおさめるかのように瞳を閉じた。

唇が重なりそうになる寸前で、ライドックは突然顔を離す。

「ライドック様？」

包帯の下の彼の顔は苦しげに歪んでいる気がした。

【私のこの包帯の下は、君が目をそむけたくなるものだ。それでも

それでも、私の気持ちは変わりません」

掌に文字をつづる彼の手を途中で止めて握りしめた。どれだけひどい傷があるかと、焼けただれた痕があるかと、彼が彼であることに変わりなどない。

再び見つめ合い、そっと唇を重ねた。触れるだけの軽いものなのに、心が打ち震えるのを感じた。

セシリアは初めて、これが恋なのだと思えるものに出会えた。抑えきれない熱と、胸の高鳴りが体と心を支配する。

出会って間もないというのに、この旅の青年が愛しくてしかたないと思えた。

それが、国王への裏切りになると分かっているにもかかわらず

## 第十四話：セシリア禁断の恋（後）

「んーっ」

柔らかい毛玉に顔をくすぐられた気がして、セシリアは目を覚ます。

一晩過ごした洞窟の中には、さんさんと朝日が差し込んでいた。掛かっていた上着を取ってゆっくりと体を起こす。堅い石の上で眠ったせいか、体の節々が痛い。

すでに起きていたのか、それともずっと起きていたのか。ライドックは洞窟の入り口に座って荷物をまとめていた。

【おはよう】

「おはようございます」

こちらを振り返ったライドックの口の動きを読んで、セシリアはそう返した。

妙な咳払いをする彼に、セシリアはドレスが微妙に肌蹴ているのに気づき、慌てて直す。

「すみません」

それにライドックは小さく笑った。

ライドックはセシリアのそばに來ると、彼女の掌に文字をつづつていく。

口のきけない彼とのこのやりとりは、妙にセシリアの心をくすぐった。

自分たちだけの世界があふれている気がして。

【下山しながら、通りがかった馬車に乗せてもらおう。もちろん、奴らには見つからないように注意して】

「はい」

【そばに水がわき出ているところがあるから、顔を洗ってくるといい】

そう言っけて口づけを落とす彼に、セシリアは胸の高鳴りを感じ、頬を赤く染めた。

(何て優しい人……)

城ではさんざんな目に遭った。久しぶりに帰郷してもこのざま。だが彼に出会ったことで、今までの心の傷がいやされていくような気がしていた。

(でも……)

セシリアは嫌な気持ちを振り払うかのように、冷水で顔を洗った。

ウィルたちは未だセシリアたちを探しているらしい。所々から、妙なうめき声のようなものが聞こえる。

息をひそめてそれらを避け、そばを通った馬車の荷台に二人で飛び乗った。

【もう大丈夫だ】



セシリアもホツとして息を吐く。

【この積荷の送り先をみると、どうやら町の方へ行くらしい。運が良かった】

ライデックは自分の荷物を置いて微笑んだ。

町へ戻る。

あれだけの目に遭った後なのだから、それはとても嬉しいことのはず。家族とて心配しているだろう。

だが、妙に胸が痛い。

「町に着いたら、ライデック様はどうなさるおつもりですか。また、旅に……？」

それに彼はじつと押し黙る。やがて彼女の手を取り、

【本当は、私と一緒に来てほしい。だが……私は一人で行かなくてはいけない】

「……そう、ですか」

自分の立場をわきまえないければならないのは、セシリアとて同じ。もし彼と一緒に来てくれと言ってくれても、それに応えることなどできない。彼女がいなくなれば、アディソン家は、母や使用人たちは確実に路頭に迷うことになるのだから。

このまま別々の道へ。それ以外になかった。  
わかつていたことのはずだった。

【この短いひと時の間でも、私のことを愛してくれていたか？】

これほど悲しい問いがあったらどうか、とセシリアは涙をこぼしそうになった。

「……はい。とても」

見つめ合って微笑み口づけようとした瞬間、馬車が大きく揺れて、固定されていなかった荷物が崩れた。頭上に降り注いでくる木箱に、セシリアは息をのんで目をつむる。

「！」

大きな音がしたが、セシリアに痛みはない。どうやらライデックが覆いかぶさるようにして庇ってくれたらしい。

「だ、大丈夫ですか！ ありがとうございます」

ハラリと包帯が取れた。

その下から現れた顔に目をむく。

サファイアブルーの瞳、はちみつ色の美しい髪の男は

「へ……陛下！」

クライドはほどけた包帯を引っ張りながら、やれやれと体を起す。

「そんな……らららら、ライデック様は……あなただったんですか！？」

「見ての通りだ」

よくよく考えてみれば、LYDECライテックはCLYDEクライドを少し並び替えただけの名前。話せないと言ったのも、声でバレるのを防ぐためだったらしい。

確かにあの包帯の下は、セシリアが目こそむけたくなるような真実が隠れていた。

(うそでしょう！ 恥ずかしい！ 恥ずかしすぎる！！！！)

嫌っていたはずの男相手にも気づかず、胸をときめかせていた数分前の自分を殴って、いや、蹴り飛ばして木につるし上げてやりたくなった。

(愛してるって言っちゃった！ 愛してるって言っちゃったあああ  
！)

『愛してくれていたか』の問いかけに、肯定してしまった事実  
に軽く混乱する。

キツとクライドを見据えた。

「くっ……私の理想の騎士様を返してください！ 初恋だったのに」  
「知ったことか。そなたのせいで包帯が取れたのだろう……」

絶対にからかわれると思ったが、そんな様子はない。むしろどこか  
が気まずそうに見えた。

「何をしに来られたんですか。私はあなたと一生会わないつもりで  
帰郷したんです。顔も見たくありません」

クライドはそれを鼻で笑う。

「そなたは莫迦<sup>バカ</sup>か。女がたった一人で何ができる。あの家と土地の維持管理費や母親の医療費、それに自分たちの生活費に加えて使用人たちの給与まで面倒みられると本当に思っているのか？」

「何とかします！ あなたに頼るくらいなら」

「だからそなたに一体何ができる。余に頼るしか」

「あなたには頼りません！ たとえ……この身を売ってでも……」

本気だ。その力強い双眸が言っている。クライドは視線をそらした。

「……そんなに嫌なら表向きには余の妻としておいて、どこか遠くで別の男とでも暮らせ。一応余の妻という身分にしておけば、そなたの家の面倒を見る理由づけになる。アレックスも好きに使えばいい」

「！？」

「良かったな。これでそなたの家も安泰、そなたも余の顔を見ずにすむ……。万事解決だ」

クライドはどこか悲しげに顔を伏せた。

だが、その言葉がセシリアの頭の血管をぶち切った。

「何なんですか……」

クライドが顔を上げた。

「だから、これでそなたの気も済むだろうと」

「何なんですか、勝手に決めて勝手に落ち込んで！ 自分一人で決めて私の気持ちは無視ですか？ それで償った気にならないでください！ ありがたいどころか、こっちは気持ち悪いんですよ！」

「き、気持ち悪いだと？ これだけしてやって、何が不満なんだ！」  
「何が不満」？ “これだけしてやって”？ お金にはっかり逃げてただけじゃないですか！ 面と向かって、素直に一言謝ることも考えられないんですか！？」

「余は国王だ。謝罪などするものではないと教わってきた」  
「ならもういいです。さようなら」

それきり二人とも口をつぐんだ。ガタゴトと馬車の走る音だけが響く。

「……謝れば、城に戻ってくるのか」

たっぷり時間を置いて、クライドがそう尋ねた。

「国王は謝らないんでしょう？ そんなこと、聞くだけ無駄です」

セシリアはクライドのそばを離れ、小窓のそばにもたれた。クライドはそれを追いかけて、隣に座る。

体を離そうとしても、すぐに距離をつめてくる。

「何ですか？」

「謝れば、戻って来てくれるのか。余の元に……」

「ええ、いいですよ？ 謝るのなら」

半ば投げやりに返事する。だがクライドは何度か咳払いすると、

真剣な表情でセシリアに向き直った。

「こ、この度は」

どうやら本気で謝ろうとしているらしいクライドに、セシリアは驚きと戸惑いの入り混じった表情を見せた。

（本当に謝るの？ あの腹黒王が……？）

「そなたを信じず、す、す、す……す……… かった」

言い切ったとばかりに、クライドはじっとセシリアを見つめる。

「……。聞こえませーん」

「何？ す…… かった、と言ってるだろうが！」

「“酔を買った”にしか聞こえませーん」

「す…… すまなかつたッ！」

おそらく彼の人生の中で、初めて出た単語なのだろう。それは転げ落ちるように口からもれた。

だが気恥ずかしさからか「なぜ国王たる余が……」などとまだブツブツと言っている。

セシリアはやれやれと嘆息した。

「父はよく言っていました。朝起きて朝食ができてるのは、料理人を雇っているからじゃなくて、自分より早く起きて作ってくれる人がいるからだって。ベッドのシーツがいつもきれいなのは、使用人を雇っているからじゃなくて、一生懸命きれいにしてくれる人が

いるからだつて。野菜だつて、ドレスだつて、自分じゃない誰かが作ってくれているからお金で買える。みんなで支え合ってる。だからどんな大金より一人の人が大切で、大事にしなければいけないだつて」

クライドはじっとセシリアを見つめた。

「傷つけたら謝って、優しさを受けたらお礼を言う。そこには王様だとか貴族とか民とか関係ありません。単純で、だけどとても大事なことです、陛下」

クライドはゆっくりと荷台の天井を見上げた。

「……すまなかつた」

まだ改善の余地がありそうな謝罪だが、彼にしては上出来だろうと思った。

(どこまで世間知らずで不器用なのよ……)

セシリアは気持ちを切り替えるように、小さく息を漏らす。

「ところで、どうして私のいるところが分かつたんです？ あのとき誰も後を追いかけてきている様子なんてなかったのに」

「ああ、そなたらを追いかけてようとしたが、途中で見失ったからな。だがどういうわけか、いつもそなたの元へ導いてくれる者が」

クライドはそう言って、荷物を包んでいた麻袋に手を伸ばした。だがそれはすでに開いていて、中に入っていたものが“いない”。

クライドは少々焦り気味にあたりを見回し、ふと小窓の外に目が

行った。町の端を流れるキリー河の支流にかかる橋の欄干に、ちよこんと座る子ぎつねの姿が見えた。それがふいに霧のように消えた。

「まさか」とクライドは息をのむ。

「陛下。だからどうして分かったんです？」

不思議そうな顔をするセシリアをよそに、クライドは全てを悟ったように笑みをこぼした。

「キリー河の導き……かもな」

「何の話です？」

「だから王妃道の贈り物のことだ。あの河を通って、王の心を癒す妃がやってくるのかい。まあ余はそんな話は信じていないがな」

「王妃道の贈り物……王の心を癒す妃……“妃”？」

『これからも存分に余を楽しませろ、王妃道の贈り物よ』  
クイン・ロード

「も……も、もしかしてあれがプロポーズだったんですか」

「今更何……まさかあの話を知らなかったのか？」

「ええまあ……なので、は、孕ませてやるのほうかと……」

「呆れたな。どこの未開族のプロポーズだ」

確かに、とセシリアは乾いた笑いをした。

(それじゃあつまり……私がこの人の心を癒してるってこと……?)

町で最近王が穏やかだという話を耳にしたことを思い出した。それが自分のせいなのかもしれないと思うと、今更ならもそれに小っ



恥ずかしく思う。

「返事は聞かん。謝罪もしたし、そなたは余のものだ。よその男の元へ行くなら両方殺す。いや、男は殺すが……」

じつとセシリアの瞳を見つめる。

「そなただけは許してやる」

何を勝手な、と言いたかった。だが少し寂しげな顔で口づけてくるクライドに、何も言えなくなった。

「ん……」

クライドはセシリアの口内に舌を差し入れながら、ゆっくり押し倒していく。セシリアは慌ててクライドの胸をpushした。

「あの……ちよつと？」

それでも強引に立ち並ぶ木箱の間に押し倒され、セシリアは慌てて体を起こそうとした。

「ちよちよちよ！ まさか、こ、こんなところで……！？ ダメですー！」

「うるさい。何日ぶりだと思っている」

クライドは本気で抑えがきかないのか、いつものからかいも無しに息を荒げて首筋に顔をうずめる。

「や、ちよ……そちらが勝手に部屋に来なくなっただけでしょう？」

ドレスの中に性急に入り込んでくる手を必死にどかせようとするが、しょせんは女の力。簡単に床に押さえつけられ、身動きが取れなくなった。

「そなたのせいだ。アレックスが良かったなどとほざくから。あれ以来か……」

「あつ、ん、ちょっと……こ、後宮に、他にも腐るほど女性がいるでしょう」

「興味ない」

だがここは馬車の中。いつそれが止まって御者が荷物を下ろすかもしれない。だがドレスが引きちぎられそうな勢いで、乱暴に脱がされていく。

「分かりました。分かりましたから、ちょっとだけ待ってください」

「今更無理だ」

「ちょっと、無理って……やああっ」

完全にスイッチの入ってしまったらしいクライドに押さえつけられ、抵抗むなしくされるがままに薄暗い馬車の中で翻弄されていた。

「全く……あんなところで何回も何回も……。危つく見つかるらるだったじゃないですか！」

馬車を下り、クライドに横抱きされながら屋敷に帰っていく。恥ずかしさと怒りをぶつけるように、クライドの胸をどんと叩いた。

「あの御者、邪魔をしゃがって。空気を読んでもっと先まで荷を運べ……！」

だがクライドそんなことに動じるようすもなく、彼は彼で別のことで怒っていた。

「つたく……」

セシリアは馬車でのことに怒りながらも、優しく気遣うように自分を運んでくれるクライドを見上げた。さっきまでの旅人への気持ちと、クライドへの気持ちが一つになりそうまでドキツとする。

(違う違う違う！ あれはこの人の仮の姿！ 全部ウソなのよ！！)と目をつむる。

「どうした、どこか痛むのか？」

彼の中で何が起こっているのか分からないが、そう優しい気遣いを見せられると、どうしていいのかと戸惑いを覚えた。

(何なのよ、急に……)

「あの、なんでこんな恰好でこの町にいらしたんです？ お仕事は？」

「そ、そなたが浮気をしないか見張りに来ただけだ……。事実あんな男と町を楽しそうに歩いて」

ウィルと町を歩いていたらとき、感じた彼からの殺気は、どうやら嫉妬からくる怒りだったらしい。

だがそんなことで執務をほっぽって来るだろうか。本当に浮気の見張りなら、部下にでもさせればいい。

疑いのまなざしを向けるセシリアに、クライドは視線を泳がせ、そっぽをむいた。

「セシリア！ 陛下！」

家の前で待っていた母や使用人たち、アレックスが二人に駆け寄る。警官たちも何人もいたが、クライドの姿に帽子を取って身をこわばらせていた。

「何があつたのセシリア……！」

「誘拐に巻き込まれて……心配かけてごめんなさい、お母様」

「無事だったらいいの。でも……こんなに弱って……なんてひどい」

母のマイラはセシリアの頬を包み、ポロポロと涙をこぼした。

「いえ、お母様、脱出した時点では結構元気」

「オッホン！」

クライドの咳払いに、セシリアは口をつぐんだ。

「陛下！ 陛下が助けてくださったのですね……お、お怪我を！？」

クライドの腕に巻かれたハンカチに、マイラは顔を青くした。

「妻と子が無事ならば、この程度のけがなど大したことはありません」

彼らしくない言葉に、セシリアはいぶかしげにクライドを見上げた。いつもの黒いオーラはどこにもなく、キラキラとさわやかな好青年の笑顔で対応している。

(誰、これ)

セシリアのそんな心を読んだかのように、クライドは見えないところをつねる。

「痛っ、陛下」

「陛下……本当に、何とお礼を申し上げればよいのか」

使用人もマイラも、まるでクライドが神か何かのようなキラキラとした瞳で見つめていた。

「義母上、それにアディソン家の家従たちも安心するといい。もう心配ない」

それに皆は「ああ、何と頼りになるすばらしいお方!」「セシリア様は良い方に嫁いだ」と口々にクライドを褒め称えた。

そのある種おぞましい光景を、セシリアは冷えた目で見つめる。

(ああそう、お母様たちの前ではあの旅人バージョンなわけね!?)

どつりで家の者たちがクライドのことを信じて疑わないわけだと合点がいった。彼女自身ですら、その優しさに恋までしてしまったのだから。

「陛下、あとで傷口を見せてください」とアレックス。  
「ああ」

アレックスはセシリアをチラッと見ると、

「良かったですね」とは声を潜めた。

「アレックス様、良かったとは？」

「いえ、もうセシリア様に会いたくて会いたくて、仕事が手につかないとおっしゃられていたものですから」

「え？」

「セシリア様がご病気の時なんて心配すぎて泣いて  
「ア、アレックス！」」

頬を真っ赤にそめて、クライドは声を上げた。

「陛下……もしかして私にこっそり会うためにそんな恰好で……？」  
「笑ったら落とす」

どすの利いた声に、慌てて顔をこわばらせた。  
だが、

『この短いひと時の間でも、私のことを愛してくれていたか？』

あれはライデックを演じるための言葉だったのではなく、クライドの願望だったのではないか。セシリアはそんな気がした。

(だ、だからって何ってことでもないけど……)

そう思いながらも、しっかりとクライドの首にしがみついた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8356s/>

---

王妃道の贈り物

2011年10月11日00時32分発行